

ある十二夜

序幕

日曜の朝の人通りは少ない。まだ日の昇りきらない朝霞の空の下を、小柄な少年が歩いている。

鈍い朝日にも眩しい金色の髪が、先ほどから路地を覗き込んでは一思案し、を繰り返しながら道を登っている。

少年の名前は、ミロ・アーヴィング・フェアファックス。十四歳。

イギリス南東部では指折りの進学校に名を連ねるクイーンズベリーの第四学年の生徒だ。

入学して一週間以内に、上級生と掴み合いの喧嘩をし、郊外で他校生との間に騒動を起こす。拳銃の果てには、寮内備品破損の末に五針を縫う過失、緊急車輦により病院への搬送、スミス寮が始まって以来前代未聞の新生、と注目を浴びている少年だった。

体軀は平均と比べ華奢の部類に入り、黄金色の細い髪が自由奔放に頭部を駆けまわっている。

声変わりを迎えていない彼の容貌は、甘い幼さと真率な清涼感を湛えて見るものに一種の感銘を与える。

そして、特筆すべきは彼の瞳だろう。イギリスの冷たい北の海ではなく、彼の母の故国が面する地中海の青がそのまま溶け、何者にも臆せず射るような眼差しを生む。

今も、着の身着の儘の体で、唯一の所持品といえる左手に持つ

地図を睨みつけて路上に立つ。

頭髪に刺した指をぐしゃりと握り込み、一つ、溜息を着いた。「……くっそっ！ 本当は、カミュが事件に遭ったっていう木曜日と同じ時間帯に歩いてみるのが、一番犯人に辿り着ける可能性が高いのに……！」

呟いてミロはがっくりと肩を落とし、地図を丸めて、随分と丈を持て余しているパーカーの下に隠れるジーンズの後ろポケットにそれを無理矢理突っ込んだ。

カミュは、二月の半ばの木曜日、自分を驚かすためにリーズという街の楽譜屋へ行き、事故に遭ったと、始めはそう聞いていた。

自宅で休養を取っている、と木曜の深夜にハウス・マスターのキャプテン・ベネットから聞いたときは、どんなに不安と心配で苦しかっただろう。

金曜、土曜、日曜と、顔を見に飛んで行きたいのを辛抱して、堪えて、やっと月曜にカミュの姿を自分の目で見て、二本の足でちゃんと立っている事を確認したときはどんなにほっとしたかしのれない。

カミュはそれまでダンス大会での失敗のせいで、「ミス・パロウ」などと呼ばれて理不尽な八つ当たりや、擲擲を受けていて、そのせいでとことん自分は避けられた。

カミュをそんな誹謗中傷から守ろうと、絶対に側について

いるのだと足を動かさそうとした時、カミュから無言のけれど強い拒絶の壁を感じた。

自分が一緒に居たら、「だからフェアファックスにやらせれば良かったのに」と、腸が煮えくり返るようなド最低の事を言う奴が居る、というのも、分かっていた。

分かっていたから、どうしようもなく、他に方法が思いつかなくて、カミュが傷付かないために、自分がそばをうろつかない方がいいのだと決断して、カミュと少し距離を置いた。するといつの間にか、ボールがカミュの側に居た。

カミュを探すと、いつもボールと一緒にカミュを見つける。声変わりをして、背も伸びたボールが、自分がやりたかった事をしていった。

無言でカミュを守るという意志を周りの連中に表明し、カミュはそれを受け入れてボールと一緒に居る。

つまらない嫉妬だと分かっている。でも、どうしても、「何でオレじゃダメなんだよ!」とカミュに詰め寄りたくて堪らなかった。

赤黒い不気味な色合いの、爛れた皮膚の画像が、ガツ、と脳裏から吹き出す。

目の前に蘇える生々しい火傷の傷跡と白い肌、「……つちくしょう……」と呟いて、ぎゅつと目を瞑り、ミロは歯を食いしばった。

自分で、無理矢理、カミュの秘密を暴いたんだ――。

一年前、自分はあんなにカミュを怒らせたのに、結局何も話さなかった。

その後カミュに自分の無礼を詫び、それで許されたと思つてのうのうと友達面していたら、

『それを、君が言うのか？ 昨年、上級生に酷い目に遭わされて、そのことを誰にも言わなかった君が？ 第一、私は誰かに傷つけられたとも言っていないだろう！ ……私は君とは違う……言わない事で、一体誰かに迷惑をかけたか？ 君のように、何も言わないまま、周囲に当たり散らしたりしたか?! もう、放っておいてくれ!』

あんなに自分が能天気で馬鹿な人間だと思つた日はない。

ごめんと言つて許してもらつていたと思つていたのは自分だけで、大人びたカミュは自身が受けた不快感を、自分に見せないようにしてくれていただけだったのだ。

けれど、そうやってやつと見せた自分への非難もまたすぐに綺麗に消して笑うから、本当に叩きのめされた。

その後、回らない頭で、何とかカミュが再びそんな事に巻き込まれる可能性をゼロに出来ないかと考えて、結局ボールに頭を下げた。

理由は言えないけれど、カミュの側を離れないで欲しい、と。

今頃何を？と冷たく笑われたが、カミュを独りにするのは絶対にヤバイ、と体中の血が訴える。

カミュだって、サシであんな傷を受けるわけが無い。よほど卑怯な手を使われたか、数で押されたか……。

アイオリアにも同じ事を頼みに行くと、自分と同じ事を考えていたようで、任せておけと胸を叩かれる。

そして、肝心のカミュは、これまでと変わらない笑顔で接してくれる。

これまでと変わらないって事は、きつとまだ金曜日の晩に無理矢理服はだけさせた事も、怒っていたって顔には出さないのだろうな、と思う。

そうこうするうちに、六月の演劇大会の役割分担が発表されて、カミュはポールと同じ照明係りになっていた。

そして、四月に入つて直ぐ、リーズが、カミュが接触事故を起こした街が、警戒地区として寮のボードに貼り出され、保護者にプリントまで配られた。

告知文書には、クイーンズベリーの学生のなかに恐喝の被害者が居るといふ報告と一緒に、複数人の人相書も記載されていた。

一瞬で分かった。
こいつらだ、と。

こいつらが、カミュを傷つけた。
ボードに張り出された紙を握り潰さないようにするのに、
どれだけの意志を総動員したか！

絶対に、許さない。

体が冷えるような怒りは、体験した事が無い。

カミュにバレたら、また事件をほじくり返している、と不快にさせる事は分かっていたので、日曜の朝、カミュが聖歌隊の練習に行く前にベッドを抜けて、リーズの街を、カミュを傷つけた奴等を探して歩く。

二度と、カミュを同じような目に合わせたりしない。
その誓いと、自分が今していることが本当に結びつくのか、
あえて深く追求しなかった。

カミュやアイオリアに無駄な事を、お前一人で何ができると指摘される事も十分分かっていたが、吹き荒れる不快感を止める術を他に思いつかなかった。

こいつらを消してしまえば、もうカミュはあんな目に遭つたりしない。

可能性を、ゼロにする為に、こいつら全員カミュと二度と会うようなことのない場所へ放り出してしまえばいい！

尻尾を掴んで、警察にでもソーシャルワーカーにでも突き出してやる——！

必ず、犯罪の痕跡は何処かに残っている。

きつと、何処かに、そして誰かが奇妙な印象を覚えている。
道の向こうから、グレート・デーンを連れた四十歳前後の男性が歩いて来た。

ミロは、ふつと息を深く吸い込むと、足に力を込めて走り

出した。

「あの、済みません。僕の友人が、この辺で恐喝にあつて、この辺に、そういう事しそうな人たちって居ますか？ それか、これがあつたのつて木曜日の方なのです。何かこの辺りで変なことありませんでしたか？」

探し出す！ その一念で、ミロはリーズの街を一人歩き続けていた。

第一幕

「コンの、クソ大根!! てめえはペラッペラの紙人形かただの警告機か!! 固有名詞もらつてんなら存在意義を出しやがれつ!!!」

栗色の仔牛革、クロケット&ジョーンズのオックスフォード、コノウトが唸りを上げて飛んだ。

目標物はミロだ。

目を見張つて罵声に硬直していたミロの体は、飛来してきた本来飛ぶはずのないその物体を瞬差でかわし、かわされたに靴はミロの背後の壁に声高く激突した。

「英国最高級靴の聖地ノーザンプトン生まれの聖体も、スカッシュ・ボールの代用品にされりや時世の変化に泣きたくなる

わな……」

「無駄口を叩く余裕があるなら奴を止めたらどうだ？」

「冗談だろ。あんなマッド・シェイクスピアは俺の管轄外だ。お前の方がディーブに物事こたわるあたりで共感の果てに手玉に取れるんじゃないの？」

気だるげに壁に背中を持たせかけたまま、のんびりと前方の波乱を見物しているアイオロス・エインズワースに、シユラ・コーツは冷たい視線を突き刺した。

言語棟の一室、L14教室には、演出担当のテス・フォレストの短い堪忍袋の尾が吹っ飛び、ハリケーンが出現している最中だった。

風の目の向かう先は、ミロ・フェアファックスただ一人。

「え？ 言つてみやがれつ!! ここはどんなシーンなんだよ?! それが恋している少女の態度かっ! 動作かよつ! 惚れた腫れたの経験ぐらいあんだろ?! 木を相手にしようが、枕を相手にしようが、チューの練習ぐらいしたことあんだろがつ今やれつ! すぐやれつ! そんでその時の思いを込めてもう一度この台詞を言つてみるつ!!!」

舞台を想定された空間のど真ん中で、ミロが全身を赤く染めて唇を腫縮めている。

感情が高ぶり、丸めた台本を振り回しながら、コックニー丸出しのテスの罵声に、ミロより少し離れて立つアンソニー・スミスが、あるはずのない己の責任に怯えて身を縮ませる。

演劇大会に向けての練習が始まり既に一ヶ月。稽古は台本

読みから立ち稽古へと移行している。

メンバーの構成はこうだ。

嵐の海からこの世でただ一人の肉親である双子の兄と別れ生き残った美少女ヴァイオラにミロ・アーヴィング・フェアファックス。

同じく第四学年から、オーケストラでも同席しているアンソニー・スマイス。彼の役は、伯爵家の若い女主人オリヴィアに使える侍女マライアだ。

上級学年中でかなり採めたという配役の結果は、上級第六学年から、スカッシュのエース、マイケル・アンダーソンが伯爵家に居候する党首の伯父のトビー。そのトビーの友人のアンドルーに、今年早々にケンブリッジに進学が決まったジェイク・オーエン。

下級第六学年からは、兄の喪に服する伯爵家の若き女主人オリヴィアにサガ・チエトウインド、オリヴィアを想うイリアの領主、オーシーノ公爵がアイオロス・エインズワース。伯爵家に仕える道化にシユラ・コーツ。

第五学年からは、伯爵家の執事マルヴォーリオにボーディングのドミニク・ポイル。ヴァイオラの双子の兄セバスチャンに、五歳の頃から舞台上に立っていたというアフロディーテの異名を持つアンガス・ジョシユア・エマーソンというものだ。「おい、テス……、いつまでもフェアファックスの所で止まっていると他の連中の稽古が進まないだろう。」

勉学に支障をきたさない、成績上位者が配役された傾向に

在るが、大抵、勉学に優秀な学生はクラブも掛け持ちで行っていたりするので皆忙しい。

マイケル・アンダーソンは既に進学先の大学も決まり、余裕のある生活を送っているものの、激昂に支配された下級第六学年のテス・フォレストへ、最上級生という立場から他の出演者の気持ちを代弁して声を掛けた。

「オレだってこんな所で止まりたかないっすっ！ このオレが丸五日かけて完成させた完璧な練習スケジュールを、お前一人で妨害しやがって——っ！ この、役立たずっ！！」

残ったもう一方の高貴な靴も空を飛んだ。

「——っくしょう！！ 役立たずで悪かつたなあっ！ これでも努力してんだっ！」

「ふっざけんじゃねえっ！ 結果の見えねえ努力はクズだっ！ てめえなんぞこのトイレットペーパー一掴み分の価値ねえっ！！ お前ひとり足引つ張りやがって！！」

「テス……」

見かねたサガがテスの頬を看めようと声をかける。だが、テスの最後通牒の方が早かった。

「——もう来るな——」
それは無茶だ。

と誰もが心の中で演出監督のテスに突っ込みを入れる。

「一週間毎に試験をしてやる。死ぬ気で改善して来いっ——！！」
言葉と共にテスの踵が床を離れる。

ミロは抵抗虚しく、テス・フォレストの脚でサッカー・ポー

ルのように蹴飛ばされながらL4教室から追放された。

「お前つてさ、芝居の稽古に行つてんじやないのか？」

その晩、ミロの背中に残る青あざを見て、げんなりとアリオアが呟いた。

クイーンズベリは「イングランドの庭」と呼ばれる自然豊かなケント州のカントリーサイドの一角にあり、その歴史は緩やかな丘の上に十六世紀初頭に建築された教会と、斜め後方に寮と校舎を兼ねた今は国語の授業に使われている建物から始まった。

その後、校舎は増・改築を繰り返し、今では二つの天文塔、室内温水プール、コンピューター・ラボ、シアター、コンサートホールなど最新のハイテク設備も併せ持ち、新旧の建築物がバランスよく混在している。

緑溢れる広大な敷地内には、古い石造りの校舎、学寮以外に、森林、湖、馬場、フットボール、クリケット、テニスなどの球戯場、二つのゴルフコースも備え、全人教育を旨とする伝統に従い勉学のみならず、多様に生徒の才能を発見し伸ばすべく、きめ細かな指導と豊かな教育人材を取り揃えていた。

アンガス・ジョシュア・エマーソン、アフロディーテの異

名を持ち通称アフロもしくは、ディーテと親しみをこめて呼ばれる彼は、まさにそのクイーンズベリの多彩且つ柔軟な教育方針の恩恵に預かるもの一人だった。

彼の父、トレバー・ライアン・エマーソンはロイヤル・シェークスピア・カンパニーでも異才を放つ役者としてつとに知られており、その妻は舞台照明として同劇団に所属している。

幼少の頃より舞台上に子役として上がる傍ら、クラシック・バレエも続けており、柔らかなハニー・ブロンドと空色の瞳は甘くその容姿を彩り、しなやかな体軀はモデルとしての活躍の場も彼に提供し、クイーンズベリも芸術活動の一環として彼の郊外活動を容認している。

「あ、君たちミロ見なかつたかい？」

一階のテラスでノートを広げなやら議論を繰り返しているエドモンド・ハウ、アンドレ・リチャーズ、ウィリアム・パンキン、ジョセフ・パーマーらは、食堂のガラス扉から顔を出すアンガスに声を掛けられた。

「ミロなら、今ぼくらの部屋でウォルト相手に芝居の練習してると思いますけど……」

一学年上の先輩に、一応席を立つてハウが応える。

「あ、そう。ありがとっ」

につこりアンガスは微笑むと、片手を少年達に向けて軽く上げ、陰の濃い煉瓦造りの寮の中へ姿を消した。

「……これでオレ達、部屋に戻れるかな……？」

残されたハウらはお互いの顔を見やり、ほつとした表情で

頷きあつた。

「つきしよーっ！ ウォルト、そこもう一回言つて！」

「——ミロ……俺もそろそろ自分の課題やりたいんだが……。それがだめなら、せめてもう違う場面やろうぜ……？」

ウィリアムの疲れ果てた声は、ミロの耳には届かなかつた。

「じゃあ、オレが言うから聞いてろよ！」

もし私が 私の御主人様だつたなら

あのような恋に身を焼くようになつたなら——」

「何度拒絶されても耳には入らないでしょう

悲しみの柳で小屋を作り

そこから 夜も昼も

あなたに呼び掛けるでしょう

我が魂よ——！」

ぼかん、と突然かぶさつた第三者の声に、ウォルトとミロは口を開けて戸口を見た。

「そ……さ、別に選手宣誓とかしているわけじゃないのだからさ、もつと柔らかに言つたら？」

扉に片肘預けたアンガス・エマーソンが、呆れた表情でミロを見つめている。

「なんで……ここに？ 練習は？」

「いや、君が蹴り出されてからこつちも色々あつてね。結局僕が、君の演技指導をする事になつたんだよ。宜しく」

ミロから外したターコイズ・ブルーの瞳を天井に向けて、アンガスは肩を竦める。

「あ、じゃあ俺、席外します」

「え？ いいよ。こつちが出て行くから。ミロ、隣の談話室に行こう」

そういうと、アンガスはくるりと二人の少年に背を向けて歩き始め、ミロは慌ててその後を追つた。

五月になつてぐんと伸びた日は、こんな夕刻になつても明るく談話室に差込み、少年達に短い夏の到来を予感させる。

「演劇はさ、再現芸術なんだよ。音楽と同じくね」

アンガスは、数人の生徒しか居ない閑散とした談話室を横切り、今は使われていない暖炉の前のソファに深々と沈み込むと、ミロに言った。

「優れた戯曲は読むだけでも味わい深いのが、僕たち役者はそれに更に命を吹き込み直す。優れた作曲家が残した譜面を頼りに、君たちが音で現代にそれ生き返らせるようにね」

アンガスは困惑の表情を浮かべて自分を見るミロにうつそりと微笑んだ。

「僕は役者である事が好きだ。

普通、人間は一回きり自分の人生しか生きられないけれど、役者は演じる人間の数だけその人生を生きられる。こんなに贅沢な職業はこの世に他に無いと僕は信じている。

僕等の演じる人生は、狭い限られた板の上だけで起こつて

終わる虚構に過ぎない。

けれど、この虚構の中に、役者一人一人が探し当てた真実を持って演じた時、僕等はまさにその瞬間に演じる本人であつてそれ以外の何者でもなく、観客は舞台では無く僕たちを現在に、今まさに彼等の目の前で生きている人間として共感をもつて見つめる。

僕たちの演じる人生は、観客一人一人の現実の人生に働きかけ、ゆきふり、笑いや涙を引き起す。最後のカーテンコールでの拍手は、僕たち役者への拍手ではなく、舞台にいた人間への賞賛と感謝の言葉だ。

再現芸術は、必ず受け手と芸術の間に仲介者を必要として厄介だが、その分全ての札が出揃つたときの影響も大きい」

ミロは、滔々と続けられる演劇論に次第に眉根が寄つていった。

この一つ上の学生が、如何に演劇に対して真摯であるか、ゆつたりとした居住まいの奥からひたと伝わる気魄の塊がある。それが、ミロに足を踏ん張らせる。

ぐつ、と緊張に肩が上がる。

と、音もなく立ち上がったアングスの顔が、ずいっとミロの目前に迫つた。

「あのさ、君、サガ・チエトウインドに恋しているのだから？」

「は——？」

ミロは、アングスの言葉を理解する前に口をあぐりと開き、やつと脳に言葉としてそれが伝わり顔をかつと火照らせた。

「あーああ！ そんなに真つ赤になつちやつて……。ま、確認しなくても分かつているんだけどね」

アングスの言葉にミロの心臓は跳ね上がった。口を動かすが声が出てこない。

去年の春、必死の思いでサガに告白した記憶が蘇つたのだ。

「だつたらさ、簡単だと思ふんだよね。大公に片思いするヴァイオラを演じるのはさ。テスが言っていたのもそういう事なんだよね」

「？？！？」

ミロは、顔中に困惑と狼狽とパンクしそうな疑問を浮かべてアングスを穴の開くほど見詰めた。

「気恥すかしいのかも知れないけどさ、こういうのつてさつきと腹を括つて曝け出しちゃつた方が楽だよ？」

僕も忙しいから毎日君の面倒は見えて上げられないし、君もオケの練習があるんだろう？ だから、オケの練習がない時に言語棟のL18教室でやろう。もう演劇担当の教官に話は付けてきた。あそこなら部屋の大きさもいい具合だし」

こつさえ掴んだら、楽勝だ。

と、アングスは一方的に話を打ち切り、ミロは、とうとう眉毛を寄せる以外、一ミリも体の筋肉を動かさずにその姿を見送る事しかできなかった。

サガの事を考えながら、ヴァイオラを演じればいいのか？

本当にそんな事で、あの石頭のテスを納得させられるのか？ 耳に籠る痛いほどの熱と、こめかみから流れる汗がミロの

体をさらに緊張させた。

二日後、アンガスとの始めての個人練習の日、ミロは足取り重く言語棟への道を辿っていた。

言語棟は本校舎の裏手にこぢんまりと、コニファーガーデンに囲まれて建っている。

午後四時を少しまわつた空はまだ明るく清んでいて、その下を小さなシマリスが何を慌てるのかちよろちよろと走り回つては、コニファーの陰に姿を消す。

約束のLL8教室が四階にある事を確認して、ミロは螺旋を描く手すりに手をかける。

とにかく、何としてでも早く上手く演じられるようにならなければ、これでは毎日曜に街へ出てカミュをあんな目に遭わせた犯人探しにも差し障りが出る。

ミロは腹にぐつと力を入れてLL8と札の付けられた扉を開き、目を剥いた。

中は全く仕切りの無い、大ホールの様相なのだ。

「やあ、時間厳守だね。感心感心」

アンガスは、この広いガランとした部屋の端に打ち付けてあるバーに寄り掛かりながら、ニコニコと微笑みを浮かべてミロを見ている。

ぐるりと天井を見回してミロは確信した。言語棟の四階部分は全体で一つの教室になつているのだと。

「まずは、発生の練習からしよう。」

君の声はまだ変声期前で声質は高くて軽い。高いというのは比較的聞き取りやすいものではあるけれど、君のはただ大声を出しているだけで、それは客席の端まで囁きでも届くような「声」じゃない」

アンガスは、すつとバーから体を離すとミロと反対側の壁に向かって歩き始めた。

「君は、演じる、という事を大げさな動作で感情を表現する事と誤解しているようだから、はつきりといつておくけれど、演技というのは、声でするんだ」

アンガスの背から聞こえる声が、するりと下がり深刻な色をその床に刷く。

「これは僕たちの日常生活でも全く同じだと思ふけれど、人間は動作で感情を表すんじゃない。まず、声に感情を乗せるんだ。いや、声が、どうしても感情を反映してしまふ、と言う方がより正確かもしれない」

部屋の端に辿り着いたアンガスがぐるり、と振り返り、ミロの姿を射る。

「畢竟、そのもつとも重要な声が客席にしつかり通らなくては意味がないからね。まずは通る声を作ろう。いいね？」

教室の端と端に互いが立ち、台詞を言い交わす。

アンガスの声は、特に大きな声をはつきりと絞り出して見えないように見えないとも、一つ一つがクリアにミロの耳に届きミロを唸らせた。

ちようど一幕分の朗読が終わると、アンガスは再び何か引

かれた線の上を歩くように真つ直ぐにミロの隣に戻つて来ると、いきなりミロの腹部を拳で叩いた。

予測していなかった行為にミロが前にめり込むが、アンガスはそれを気にした風もなく手にした台本を片手に次々と支持を出す。

「まず、今気合入れたその部分で呼吸して、喉で声を出そうとしない事。美しくないからね。舞台で行う発音は、普通にしたのではその通りには聞こえないんだ。濁音の前にはもつと音を溜め込んで」

すらすらと列挙される留意点をミロは必死で頭に叩き込む。「じゃあ次は、今言った発声の仕方に気をつけながら、言葉に心を込めていつてみる。こないだも言ったけど、僕は君にオーシーノ公をサガ・チエトウインドだと思つて演ずる事を強く薦めるね。

君はサガが好きだ。サガも君の事は一番信頼の置ける小姓としていつも側に君を置いている。そして、サガは苦しい恋心を君に語り、恋の成就の助けを君に求める。

君は、報われない自身の恋心を抑えて、サガの思いを叶えようと動き出す。

どうだい？ 理解しやすい展開じゃないか？

後はその気持ちをも舞台の上で真摯に表現する事だよ」

アンガスの満面の笑顔に、ミロはとにかく必死で頭の中にサガの顔を思い浮かべた。

そして、台詞を口に出す。

頭痛を覚える程集中してサガを脳裏に思い浮かべながら、ミロは演じた。しかし結局この日も、ミロは大根役者のレツテルを返上できないまま一日の稽古は終わってしまった。「おかしいなあ……。どうして君の台詞つてそうまで白々しいんだろう？ ここまで来ると一種の才能？ ちゃんとサガの事想像しながら言つてたんだよね？」

アンガスの言葉に、ミロはすきすきと痛む頭を持って余しつつ、落胆のあまり頷くことしか出来なかった。

五月最初の日曜日、これまで通りミロは先月から続けていた一人での聞き込み調査に早朝から街へ出かけていた。

金曜の晩、一週間の成果をテスに図られ、三行でダメだしを食らった。

本当は、誰か練習相手を見つけて演技の練習をするべきなのかもしれないが、ここまで下手だへボだと言われると、正直やる気も失せる。

また、誰かに練習相手を頼もうにもみなそれぞれにテストの準備や係りの役割分担に追われなかなか手が空かない。

何か演技で困ったことがあったら相談に乗ると言つたカミュは、最近ますますポールと一緒に行動していてなかなかタイミンが掴めない。

ミロが演劇の稽古をするように、カミュも照明係りとしてプランを練つて、技術の習得に忙しい、という事は分かつてゐる。

分かっているが、何もそんなに楽しそうに夢中にならなくてもいいんじゃないか？ とすこし恨めしくも思うミロだつた。

自分が煮詰まつている分なおさらそう感じてしまうのかもしれない。

カミュが照明に興味を持つて楽しんで仕事をこなせるなら、いい事尽くめのはずなのに……。

最近では、消灯ぎりぎりまでポールと一緒に自習室で話し込んでいたり、その手の本を読み漁つたりしているらしい。

以前なら、合奏に誘えば絶対に飛びついてくるような雰囲気があつたが、今はそれも怪しい。

この寂しさは、なんなのだろう？

この物足りなさは、何故なんだろう？

雑念ばかりがミロの胸に浮かんで消える。

犯人を捕まえられたら、少しはこの自分ばかりがカミュの役に立っていないような、カミュの傍に近づけないような、そんなもとかしさを消すことが出来るだろうか？

「先週はこつちを歩いてみたから……今日は西に行つてみよう……」

応える人も、聞く人もいないのに、ミロはわざとそう口にして、雑念なんか振り落とされてしまえ、と歩み速めた。

ここの一月がそうであつたように、同室のアイオリア、カミュが目覚めた時にはもうミロの姿は部屋に無かつた。

カミュ・パロウは日曜の午前中にある聖歌隊の練習ポールに参加し、昼食の時間少し前に再び自室に戻つた。

まだミロの姿は無い。

部屋には、同じく午前の練習を終えたアイオリア・エインズワースがシャワーを浴びて来たのだから、濡れた髪を乱雑に拭つているばかりだつた。

「お、カミュ、今終わったのか？」

「ああ」と、カミュは答えて雑語の束が入つた分厚いファイルを机の上に置いた。

「飯、まだだろう？ 食に行こうぜ」

腹減つた一ツ！ と叫ぶアイオリアとカミュは一緒に部屋を出る。途中、廊下でポールとも合流して、彼等は平日に比べて人がまばらな食堂に席を取つた。

「オレはこれから道具の組み立てだけど、お前らもなんかあんの？」

アイオリアは一通り食欲を満たすと、照明係として同じ役割を分担するポールとカミュに尋ねた。

「僕たちも今日はこれから機器の取り扱ひの説明と実際の演習があるよ」

「へえ……。オレ、最初照明係つてあの棒の上にある色の着いた円盤回すだけなのかと思つてたけど、そうじゃないんだよな。」

なんかスイッチとかめちゃうくちや多くね? 楽屋の」

「うん。音響ほどじゃないけれど、色々操縦を覚えなきゃいけないから大変だね。それに、本番で使うシアターにあるような照明セットはやっぱりシアターに一つしかないだろう? 彼の寮も操作の確認や計画を立てるから練習する時間も限られてるし……」

「ルーファス、そろそろ行かないと……」

ポールが話に興が入りそうなカミユの腕を突付いた。

カミユは、はつと時計を見やって、ごめん。去年の先輩の話を聞いてからシアターに行くから、とアイオリアを席に残して立ち上がった。

後は、またポールがカミユと一緒に夕方まで演劇大会の照明係としてシアターに居ると。

アイオリアは独りごちた。

もう一ヶ月も前の事になるか、ミロに相談を持ちかけられた。絶対にカミユを一人にしないようにするために、協力して欲しい、と。

カミユの傷を見て、性質の悪い事件にカミユが巻き込まれたという確信をすぐにアイオリアは持った。だからアイオリアは二つ返事でミロに協力を約束した。

そしてミロは、どうやらポールにもこの話を持ちかけたらしく、朝から就寝まで、必ずこの三人のうちの誰かはカミユと一緒にいるようになっていく。

もつとも、ダンス大会以後はもともとポールがカミユを守

るようにしていつもくっ付いていたので、あまりアイオリアの出番は無いのだが。

今日も、ポールは朝カミユを部屋の前で待つてから、昼食を一緒に取り、同じ照明係としてカミユと連れ立って食堂を後にした。

一方、肝心の発案者のミロと言えば、同じ履修科目の教室への移動、食事の時、オーケストラへの行き帰り、そのぐらしかカミユの側にいる様子はない。

演劇大会での大役を思えば無理もないのだろうが、週末のこんな時まで姿が無いのは気にかかる。

あいつは、ほつとくと何かしてかしてそうで怖い。

ミロのお目付け役を自任するアイオリアは、今夜にでも聞き出してみるか、と呟いて残っていたサラダを一気に口の中に詰め込むと、トレイを片付け太道具の書割作成の為に食堂を後にした。

その晩、夕食の時間近くにミロはどこからともなくひょっこりと寮に帰って来ていて、カミユとポールの着いた席と同じテーブルの端にトレイを置いていた。

テストの事、演劇大会の準備の事、食事の事、クラブの事、取りとめもない話題がテーブルの上を飾り、既に二年近く共に生活をする少年達の会話はそれなりに賑やかだ。

ミロは、カミユの方をちらりと視線を滑らせた。

カミユは聞き上手だ。だから、彼の側にはいつも会話が絶

えない。

今もハウやウォルトが今年の冬に公開される予定のバック・トゥ・ザ・フューチャー PART2の展開についてカミュを前にして色々言い合っているし、アンドレやジョセフは数学の授業の事を、アンソニーとマックスはオケの話をしている。

明るく賑やかに日曜の晩を楽しむ友人たちを目にし、ミロの方はまたなんの収穫も無かった一日に一層気を滅入らせた。おまけに、うっかり国語のレポートの提出期限が日曜の朝一番である事を忘れていたのだ。

談話室に移動しておしゃべりの続きをしようとして立ち上がった皆と別れて、ミロは独り自室に戻る。

最後にカミュと話したのはいつだったっけ？

と、廊下の反対側に消えていく綺麗な赤い色を見て、溜息が零れた。

談話室で二チームに分かれてチェスの熱戦を繰り広げていたアイオリアとカミュは、消灯十五分前に帰宅した。

「なんだ、お前、まだそれ終わってなかったのか？」

アイオリアが呆れて声を掛けると、ミロは答える時間も惜しいとばかりにただ一度頷く。

「なんでそんなに要領が悪いかな……」

小言めいた呟きを漏らしたアイオリアと目が合ったカミュは、笑いながら少し肩をすくめて見せる。

結局、消灯三分前になってやっとミロは鉛筆を置いた。

床に散らばったレポート用紙数枚を拾い上げてやりながら、アイオリアはこのレポートを読むのはめになる教官の忍耐を思つて溜息をつく。最後の数枚は、もはやナメクジが這つた跡としか思えない筆跡だ。

バタバタと翌日の時間割を揃え始めたミロに、カミュから声が掛けられる。

「忙しいのは分かるけれど、もう少し時間配分を考えないとこれからますます大変だよ。」

カミュは、ミロの机の上に積まれた参考文献の山を指して笑いながら言つた。

ミロは、よく言えば完璧主義、悪く言えば要領が悪くところまで調べてレポートを提出する。

教官からの評価はそれなりに高いものの、そこまでの精度は教官の方も求めていない場合もあり、そうすると自分達ならテキストと他に指定図書の数箇所を読めば仕上がつてしまふレポートでも、ミロはこうして何日も掛けて完成させる事になり、それはカミュの目にはとても効率が悪く見える。

時間があればそれでもいいだろう。しかし、演劇大会まで一ヶ月を切つた今、これからますますミロの時間はそちらに割り裂かなければならなくなる。

それでは、彼の体が持つまい。

平均より華奢な体つきの少年の人並み外れた体力と集中力は、それなりにこれまでの付き合いで知っているが、演劇は個人の集中力でどうなるものでもない。

団体で何かをする、という事がどう見ても得手ではないミロを思つて、カミュは言葉を続けた。

まさか演劇の練習でみんなとうまくいかなくて居場所が無くて困っている、という訳ではないのだけれど、と思ひながら。

「このところ週末に居ないことが多いようだけれど、何か手伝える事があれば手伝うよ?」と。

窓を挟んでカミュの机はミロのその隣にある。カミュは椅子に深く腰掛けて、読みかけていた明日の予習のラテン語のテキストから目を離し、にっこり笑んでミロに申し出る。

ミロは、明日の午前の授業のテキストとノートをブックバンドで止めようとしていた手を止め、一瞬言葉に詰まった。

本当の事を言うべきか、適当に何かごまかしておくか、逡巡した。

その様子にはアイオリアも気付いたようで、集めた紙の束をミロの机に置きしな、バチンとミロの頭を弾く。

「オレも気になってたんだよなあ。お前、ここ最近いつたい何処に行つてんだ?」

ミロは、きゅつと口を引き結んだ。

なんとつてごまかせばいいのか? 必死でうまい理由をひねり出そうとするが、もともとそういつた事に疎いミロには瞬間に一人を納得させられるだけの、説得力のある説明を組み立てられない。

そして、巧く誤魔化す言葉を思いつけないままに口を開いた。

「少し、調べたい事があつて……だからちよつと外に行つてただけだよ」

「外つてどこだよ」

アイオリアがさらに追求する。

咄嗟にどうしても適当なごまかしを口に出來す、ミロは、「リーズ、と言つてしまつた。」

ミロが口にした街の名前を聞き、今度はカミュが言葉を失つた。

「お前、そこは今月の初めに性質の悪い連中がいるからつて、通学のやつ等も含めて全員に注意があつた街じゃないのか?」

アイオリアはカミュが行つたという楽譜屋も、車と接触したというも正確には知らない。カミュが友人たちに事の次第を説明した際、巧妙に包み隠したせいだ。

カミュだけが、一瞬でミロの意図を悟つた。

そして、体を震わせた。

一ヶ月前、あの湖の畔での会談で、もう、自分の結論に納得してくれたものとばかり思つていたのに――。

感情の分析をする間もなく、カミュの胸に怒りの熱が灯つた。

「ミロ……君は――」

永遠に封印してしまいたい屈辱の出來事を再びめぐり返される事への怒り。自分の言葉を、願ひを受け入れてくれなかつたミロへの失望と疎ましき。一ヶ月の間、そうして自分のたった一つの願ひを裏切り続けていたミロへの憤り。

強い感情が、カミュの全身を支配し、その言葉を止めた。

これほどの怒りをこれまでカミュは味わった事が無かった。

ミロは、カミュの言葉が震えた事に気付いた。

目を上げてカミュを見ると、顔面が蒼白になっている。

決して、軽い気持ちで街の名前を出したわけではないが、ここまで激しい敵意が返ってくるなど予想だにしていなかった。

きつと、カミュは自分が「事件」をほじくり返している、と思っただ事だろう。

一回、口の中に沸いた唾を飲み込んで、腹の底に力を入れてカミュに言った。

「別に、危ないことはないかもしれない。今までだつてなかったし、みんなこれまで普通に行つてたじゃないか」

詭弁だと取られることは承知の上だった。

そこから辺を、理詰めで責められる、と覚悟していた。

けれど、返つてきたのは全く余裕の無い、悲鳴にも似た言葉で、ミロは動揺した。

「そんな事……！ もう構うな、と言つただろう!!」

何か、いつもと反応が違ふ、おかしい。

はつ、とミロは瞬時にカミュを落ち着かせるように言葉を選んだ。

「うん。分かつてる。だから、カミュには全然関係無いことだ。カミュは気にしなくていい。オレがただ調べたい事があるつだけだから」

有めるつもりで言つた言葉に、激昂が叩きつけられた。

「そんな」まかしが通用すると思つているのかつ!!」

カミュは自分の服の胸元を握り締めて叫んでいた。

自分があの忌まわしい日の記憶から立ち直るきっかけ、ミロでなくて良かったと心から安堵したあの幸福感、それを、当の本人のミロがめちやくくちやにしようとしている。

それは、圧倒的な強さをもつてカミュの内を攻撃した。

「まかしでもなんでも無いだろう？ 先生達がそういう情報があるつてんでオレ達に注意するよう呼びかけたつてだけで、カミュは心配しなくても大丈夫だ」

それだけ触れて欲しくない事なんだ。でも、まだ自分も何も話していない。

勝手にカミュが、自分がカミュの一件を調べてね全てを知ろうとしていると思つて怒つているだけだ。

それは、違ふ。何があつたのか、知りたいわけじゃない。それなのに……。

「君は——っ！」

カミュはもはや問答無用の勢いでミロに怒りをぶつけてきている。

ぐいつ、と腰を浮かせて睨み付けてきたカミュの形相に、ミロは自身も不満の塊が胸に込み上げてくるのを感じた。

なんだよ、ポールや、ウォルトや、アンソニー、みんなの話は聞くくせに、オレだけ頭ごなしかよつ——!!

「それで、見つけてどうしようっていうんだ——？」

カミュの詰問調の鋭い言葉にミロの神経も苛立った。

「カミュが思っているような事はしていないし、カミュに迷惑は掛けない。今だつて掛けてないだろう？」

奥歯に力を込めて、ミロはカミュを睨み返した。

二つの視線が一步も引かず互いを圧し合い、狭い部屋の空気を支配する。

アイオリアは、ただ嘩然として二人の様子を見守るしかなかった。

カミュは、自分の怒りの炎を抑えようと必死で理性へ繋がる道を探していた。

そんな事、なんの役に立つというのか？ 例え彼等がマリファナを吸っていると、または少年達から恐喝まがいに金を巻き上げているとなんらかの機関に連絡したところで、一体事態の何が変わるといふのだ？

自分が起こった事は無かつた事にはならないし、現行犯として摘発の機会があつても、ガイと呼ばれる男がそれで態度を改めるとは思えない。

それより何より、たつた一人で喫き回る事の危うさが、どうして分からないのか。

体格が違う、おそらく何か武道をやっている、ただの不良集団ではなく、何か大人の組織が背後についている可能性だつてある。

危険だと思われる事は全て報告し、それは全校生徒にも確

実に伝えられた筈だ。

彼等に自分達の常識は通用しない。

本能からくる警鐘が頭を割る勢いで鳴り響く。

結局、ミロは何も分かつていないのだ。

分かるうともしていない。

自分の気持ちなど、全く汲む意思も無い。

悔しく、悲しく、理由の見えない絶望で胸の奥で熱いものが膨れ上がる。

やがて、ようやくの思いで探し当てた理性は、冷たく暗い

空洞をカミュに提示した。

なにもかも、くだらない。

虚しいだけだ。

カミュは、ゆつくりと椅子から立ち上がると肩に薄いト着

を一枚羽織歩き出した。

「どこに行くんだよう？」

ミロも椅子から立ち上がり、大腿で部屋のドアの前へと移動する。

自分で勝手に思い込んで、怒りをぶつけて、それで今度は

話すらする価値もないという態度も頭わにこちらに一瞥もせず部屋を出て行くうとしていた。

ミロの腹もカツ、と熱くなつた。

「君には関係ないだろう。そこを退け」

カミュが低く扉の前に立つミロを恫喝する。

「関係なくないだろう？ もう消灯だ。ルームメイトが勝手に部

屋を出て居場所が分からない、っていうのは全体責任だろうが」
ぞつとした。

とてつもなく危険な綱をわたっている。

下手を打てば、もう絶対にカミュは自分を許さないだろう。

そう理解できて、

ここで引けば、またカミュは数日経つたら笑つてフツウに
接してくれる。

そう計算できて、

ダメだ。

絶対に、今、カミュを逃すわけには、いかない。

そんな、普通の友達のをカミュと築きたいわけではない。

もつと踏み込みたい。

もつと近付きたい。

「気分が悪いから医務室に行くだけだ。監督生が見回りに来た
らそう伝えてくれればいい」

「気分が悪いって、熱か？ 腹でも痛いのか？ 病氣じゃない
んならここで大人しく寝てればいいだろう」

ミロは、怒りの高揚感とそれに付随する冷たく冴え冴えと
した思考を味わっていた。恐いほど、すらすらとカミュの言
葉を打ち負かせる。

カミュの、冷たく硬くミロを拒絶する濃紅茶色の瞳に、ミ
ロは微塵も負けない強い視線を叩きつけた。

しかし、カミュはミロのその瞳に答えるつもりも、押し問
答を続ける気も無かった。

彼は、力任せにミロの体を戸口から押し退けようとする。

ミロの体は大きく揺れたが、ドアの前から消える事は無かつ
た。

体の割に大きくて骨はつたしつかりとした手が、ドアノブ
を指が白くなるほど握り締めている。

そして、この時だった。

何かが、ミロの中で爆発し、

カミュに対する遠慮や同情、負い目、全てを吹き飛ばして
言葉が迸った。

「勝手に決め付けるなよっ！

オレの話聞かないで、何がカミュに分かるっていうんだ
よっ！

「じゃあ、何のためにあの街に行く必要があるっ?!

「だからっ！ それはオレの問題で——！ カミュがそれを止
める権利はないっ!」

「だったらそこを退けっ!! 僕はもう君には何も言わないっ!!」

真つ平だ!!

こんな大声を出して、みつともない……。

こんなに自分の感情を持って余して、情けない——!

カミュはもうミロの目も、体の一部すらも視界に入れたく
なくて、ギリツと齒軋りをしてミロの指を一本ずつ引き剥が

しにかかった。

折れたつて、知るものか——!

凶暴な感情が嵐の一陣のようにカミュの理性を薙ぎ払った。

その風にミロの声が重なる。

「また逃げるのかよ——!

それで明日には笑つて誤魔化すつもりか?! 誰も責めないで。何かある度に、人から踏み込まれるのを避けて、プロテクトしてつ!! 自分以外に迷惑掛けないつてそんなに大事なことかよ——つ!

ミロは、震えはじめた唇の奥から無理矢理言葉を引きずり出した。

熱く、早い何か、物凄い速さで溢れ出ようとして、勢いばかりが先走り、カミュの事を思いやる余裕がない。

廊下側にベッドのあるアイオリアは、二人の、そのあまりにも強攻的な激しい態度に舌を巻いた。

つつきり、先月にミロが無理矢理カミュのあの生々しい傷をこの部屋で剥き出させた一件は、二人の間で整理がついていたと思つていたので。

——こんなやり方をしたんじや、カミュはミロを二層拒絶し、嫌つてこの二人の關係は終わるだらう。

最悪のシナリオが、アイオリアの脳裏に浮かび上がった。

「オレはアイオリアみたいに優しくないし、カミュみたいに何

気なく他人の側に立つて慰めてやるなんて事なんか出来ない……。でも、オレは、カミュの、友達のもりだ。カミュが違つていうんなら仕方がない、けれど、そうじゃないんなら、少しは中に入れろよつ!!」

「僕と君のやり方は違つつ!!」

ドアノブが二人の手の中でガチャガチャと音を立てた。

カミュの指が、ミロの指に食い込む。

ミロが歯を食いしばつてその痛みを堪え、そして、叫んだ。
「勝手に……そうやつて全部一人で決め付けて、終わりにするなつて言つてるんだつ!! 文句があるなら、今、ここで全部

言えよつ!! 医務室なんかに行く必要なんか無いだらう?! オレに怒つてるんなら、ここで、オレの目の前で怒れよつ!!

オレの何が気に入らないなら、はつきりそう言えばいいだらう?!

嫌なことされて、傷付いたんなら、傷付いたつて言えよつ!! そんなに頭にくんなら、理由話せよつ!!!

腹の中に全部しま込んで、無かつたことにすんなよつ!! 全部、全部、オレにぶつかりやいじゃないかつ!!!

バシッ!!

凄まじい音がした。

ミロが空いていた方の腕でドアを思い切り打ちつけたのだ。そのドアの向こうから、人の気配がする。

一人二人の気配ではない。

——そりや、さつきから怒鳴つたり、ドアをガタガタさせ

たりしてりや当たり前か……。

アイオリアは髪の中に指を突っ込んでぐしゃぐしゃとかき回した後、盛大に溜息をついた。

「エイズワース、バローウ、フェアファックス！ ドアを開ける！」

外のざわめきはどんどん膨れ上がり、とうとう外側からもドアをこじ開けようと圧力がかかる。

騒ぎを聞きつけて駆け下りてきた寮長のダグラス・グラハム・コックスが、ドアノブに齧りつき、ぎつちりと動かないそれをなんとか回そうとする、が、滑つてうまく回せない。

滑り止めになりそうなものを持って来い、と怒鳴り、同じ階の学生が部屋から輪ゴムを引っ掴んで来る。

サガも自室の前を走る忙しい足音、切れ切れに聞こえるバローウ、フェアファックスという単語に驚いて一つ下の階に足を運んでいた。階段で、下から丁度駆けつけてきたハウス・マスターのベネットに出会う。

無言で尋ねてくる彼の視線に、軽く頸を振って自分もこの事態について何も知らない事を示す。

二人が到着した時、問題の部屋の前には既に人だかりが出来ていて、ゴムを巻きつけられたノブがぎりぎりと同じり始め、ダグラスを先頭に数人の上級第六学年の生徒たちが内開きのドアを体で押している最中だった。

ミロは、突然回ったノブに手首を取られもう一度握り直す間もなく、背中から押される勢いに負けて蹠輪を踏み勢い余つ

てカミュの胸元に衝突した。

カミュはそれをとっさに抱き止めてしまった。すると、カミュの背中にミロの腕が強く巻き付いた。

「……カミュが嫌がる事は、オレだつてしたくないよ……。カミュに嫌われたくないよ……。でも、それでも、カミュが忘れていいのと、オレがやつらを許さないのとは別の問題だ——！ カミュには関係ない。オレがそうしたいんだつ。何も出来ないのは嫌なんだつ!!」

カミュは息を呑んだ。ミロの言葉は低く、怒りがぎりぎりど滾り、悲痛な響きがかミュの体を軋ます。

完全に開かれてしまったドアの周りには、ダグラス、サガ、ハウス・マスター、そして少なくとも数の上級生たち。

一気にカミュの猛火が冷えた。

そして、こんな状況で、これ以上一言だつて何かを、過去を探られるような事を漏らすのは願ひ下げだ、と計算が働く。

カミュは、ぎつちりと自分の体を抱きしめるミロの体を押し退けようとしたが、彼の腕はびくともしなかつた。

「傷は、もう痛まないつて言つただろう？」

ミロにしか聞こえない声で、仕方なく素早く囁いてミロの戒めを解こうとする。

しかし、ミロの腕には一層の力が込められた。

自然カミュの頭はミロの肩口に押し付けられ、耳に、ミロの唇から漏れる空気を感ずる。

「オレだって、余計な事してると分かってる。でも、どうしても許せないんだ……。」

目に見える傷の事だけを言ってるんじゃない。

人を遠ざけたくなるような、拒絶したくなるような恐ろしさや、悔しさや、後悔や、悲しいのを、本当の傷つて言っただ。

本当に直るのか、直せるのかなんて、誰にも分からない。誰にも見えない。

それでも、痛いし、苦しいんだ。思い出すとみじめだ。そんな傷を、カミュが誰かから受けた事が辛い。

悔しい。
絶対に許せない。

ぶつ殺してやる——！」

カミュは、耳に嘔きこまれる言葉に嘩然とした。

ミロの息に籠る熱はなんなのか、耳が熱い。

そして、奇妙な昂揚感と裏腹に体は冷たい。

全身が総毛立っている。

恐らく、自分だけではない。ミロの言葉が聞こえる筈もないドアの側に立つ野次馬達も、ビクリとも動かない。

意志の力で、ぎらぎらと視線だけをカミュは動かす。

冷たく、空を凝視する瞳が、牙え牙えと青く燃えていた。

殺意、というものがこの世にあると、カミュは初めて身を持つて知った。

そして、その衝撃は残っていたミロへの怒りを一掃し、こ

の状況をなんとかしなければ、という焦燥感に変わる。
と、その時、突然上から声が降ってきた。

「おい、お前ら、ガキの喧嘩もほどほどにしとけよ。」

顔を上げて確認するまでも無い。緊張感の無い、暢気ときえ取れる声、アイオロス・エインズワースだ。

彼は、ざつと大腿で、ミロに絡み付かれて立ち尽くしているカミュの側に立つと、誰も予想しなかった行動に出た。

両腕を一杯に広げてカミュを抱きしめている無防備なミロの脇腹を、くすぐったのだ。

ミロは、ギャツ、と叫んではね仕掛けの人形のように両手を天に向かつて突き上げ、飛び上がった拍子にバランスを崩してそのまま床に倒れた。

ゴツン。

いい音したぜ……誰もが床で丸くなっている金髪の少年を哀れみの眼差しで見詰めた。

全員しつかり見たのだ。後ろ向きに倒れ込んだミロの体を、アイオロスがそれは見事にかわした瞬間を。

「兄貴……。そりゃ惨げえ……。」

アイオリアはげつそりと呟いた。

「サー・ベネット、こいつ、下に連れてきますか？ それとも一応医務室に？」

「あ……、いや、そうだなうちに直接連れてきてもらえるかな」

周囲と同じく、呆然としていたハウス・マスターのベネットがなんとか気持ちを切り替えてそう答える。そして、戸口に固まる生徒を散らして道を作った。

「パーロウ、お前もバカみたいに抱き付かれて固まってないで、殴るか蹴るかしろ。もつとも、一番こいつに有効なのはくすぐることだな。一発くすぐれば、喜んでお前から逃げて行くぞ？」

にやりと笑ったアイオロスの表情を見て、カミュは思う。逃げるならもつと上手く逃げろと言っているのだ、と。

カミュは知らず拳を握り締めた。

その後、ミロはベネットに連れられて部屋を去った。

野次馬も、寮長のダグラスが散らした。

まるで台風だった。

元掃除器具置き場だった小さな部屋は、急にガランとして、残った二人の少年に居心地の悪さを覚えさせる。

アイオリアには、カミュの生のままの感情を期せずして覗いてしまった気まずさがあり、カミュには、もつとも自分に近いところにあつた感情を覚悟もなく晒してしまった後悔と倦怠感がある。それらは狭い部屋に漂い重い沈黙を生み落としていた。

コチコチと規則的な時計の針が動く音だけが部屋に響く。

束の間の無音に塗り潰された静寂の後、アイオリアの静かな寝息がカミュの耳に届いた。

どれ程時間が過ぎたのか、感覚もおかしくなっている。カミュは、そつと手布を頭の上まで被つて丸まった。

ミロの怒りの激しき、殺意にまで膨れ上がった自分を傷つけた者に対する憎しみ。ぎりぎり自分を抱きしめてきた腕の力。

何もかもが強烈な印象を残すばかりではなく、今もカミュの内をかき乱している。

あまりにも間近に感じたミロの声。それを思い出すと一層ざわめきが強くなる。

カミュは、知らない間に濡れていた目の淵の冷たさを感じてぎゅつと瞼を閉じた。

ミロに向かう感情、今月始めにサガに語つた通り、決着を付けたつもりだった。

それでも、揺れる。

そして、嬉しかった。

ミロの、自分に対する執着の強さが。

きつと自分と同じ質のものではないと分かっているながら、そう言い聞かせても、それはもはや誤魔化しようのない感情だった。

翌日、先週末までの晴天はどこへ消えたか、気温は一気に下

がり灰色の空が広がった。

学生たちは寝ぼけ眼を擦り擦り、二月に逆戻りしたかのような天候に愚痴を零しながら手に手にトレイを持って朝食の列に並んでいた。

アイオリアとカミュは目が早くに覚めてしまい、もう朝食はほぼ終了といったところが集まった彼等の級友が二人を離さなかった。

昨晚の騒ぎは彼ら第四学年の消灯時間ぎりぎりに起こり、ウォルトやハウを始め同学年の仲間には誰も部屋のドアを開けて様子を見に行く事は出来なかったのだ。

が一方で、階下へ駆け下りて野次馬となった上級生たちは勝手な憶測と推察した経緯を好き勝手に話して止まらない。

今朝の食堂は朝から昨晚の騒ぎの事で持ちきりだ。

「リア、昨日は一体何があつたんだよ？ お前が居たのに、すつごい悲鳴とかあがつてドアは開かないし、寮長とかがドアを壊して中に入つたら、ミロがカミュを押し倒してたつていうじゃないか！」

「やれやれ、とアイオリアは頸を振つた。噂というものはだから手ごわい。」

「ドアは壊れちゃいねえよ。ただの喧嘩だ、喧嘩。ミロは直ぐにかつとなるだろう？ それに今回はカミュがまともに喧嘩を買つたつてだけだ」

今日になって何回目になるか知れない質問に、アイオリアはほとほとうんざりした口調で答える。

「本当に？ カミュがミロと喧嘩？」

アンソニーが目を丸く見開いてカミュに尋ねる。

「うん、そう。ちよつとね」

カミュは、につこりとアンソニーに笑顔で答えた。優しい笑顔のはずなのに、何故かアンソニーはそれ以上の追求が出来ずに口を閉じてしまった。

「じゃあ、押し倒していたとか、抱き合つてたつてのは？ なんか、ミロがカミュに告つて、それでカミュが怒つたつて話も聞いたぞ？」

ハウが興味津々に体を乗り出してアイオリアに質問を重ねる。

「アレが愛の告白なら、ハイジャックだつて熱烈恋愛ドラマに見えるよ、オレにや」

「なんだよ、リア！ もつたいぶつてないで教えろよ！ お前全部見てたんだろ？」

「ミロのバカがカミュの逆鱗に触れて、カミュが汗顔にも売られた喧嘩を買つただけだよ。お前らだつてよくしてらだろが」

「そもそもそこ信じられないだろう？！ カミュが喧嘩なんて買うか？ それも、物凄い音がするようない！」

「音出してたのはミロだけだ、ちなみに、シャウトしてたのも殆どミロ。台詞の量も圧倒的にミロ」

「それじゃ、喧嘩つて言わねえだろう！ やつぱりミロがカミュに告つて……あ、おい、カミュ、何処に行くんだよ！」

好奇心旺盛な同級生への対応は、こうしてさき気無く大ら

かに庇ってくれるアイオリアに感謝して任すことにしよう、カミュは口を閉じたままにつこりと笑顔で浮かべて席を離れたようにした。

と、そこへ、入り口にざわめきが起こる。

派手に四方に跳ねて揺れる金髪が見える。ミロだ。

そう級友たちが認識した途端、わつと歓声と口笛が沸き起こった。

どうやら、ハウが好奇心に任せて質問したのと同じ事を、ミロもまた上級生に尋ねられ、如蛸状態になっているらしい。

指の先まで真っ赤になっているミロは、食事のレーンには並ばず、別途飲み物の用意されているテーブルに進み、牛乳だけをトレイに載せ、アイオリアとカミュをいつもの窓際の食卓に認めた。そして一瞬逡巡したが、意を決したように真っ直ぐに二人に向かって歩き出した。

「よう、サー・ベネットなんだって？」

ミロが、カミュに口を開くより早く、アイオリアがミロに声をかけた。

「第五学年になるまで外出禁止つて命令された」

外出禁止……良かった。それではハウス・マスターもそれを危険な行為と認識し、手をうつてくれたのだ。

カミュはほつとした。

そして、少し気持ちの余裕が出来てミロに話しかけた。

「ミロ、朝食はそれだけなのか？」と。

本当は、今日、彼にどう話しかけたらいいのか、ずつと困つ

ていた。

普段なら快く思わないミロの小食と変食に、今日ばかりは感謝だ。こうして話しかけるきっかけを与えてくれたのだから、一方のミロは異なつた。

一瞬カミュの顔を見たが、直ぐに視線を反らす。

「違つ。もう食つてきた。五時に叩き起こされて、反省文の書き取り百回と洗車させられて、ミセス・ベネットに、要らないつていうのにハムステーキと目玉焼き二個にジャム付トースト。食べろつて強制されたんだ」

殆ど隣のアイオリアに話すように、まだ赤いままの顔をカミュの直視から外して答える。

昨晚、あれから深夜に及んでハウス・マスターから説教をくらい、ベッドに潜り込んだ時、ふいにあの不思議な高揚感から覚めている自分に気が付いた。

どう考えても、カミュに絶交を言い渡されても仕方が無い事をしてかしたに違いない、と自分の失策にとつと冷や汗をかいた。

明日、カミュは自分と口を利いてくれるだろうか？

事の深刻さに改めて気付いたミロは、自分の心臓の音が急に部屋中に響き渡り、その音に押しつぶされるようなとつてもなく大きな不安に直面した。

どうしよう？

きつと、無視される。

そして、カミュはまた一層ボールと仲良くなるんだ……。

今すぐこの部屋を飛び出して、カミュに誤りたかった。カミュが眠っていたとしても、揺すり起こして誤りたかった。カミュとのやり取りを頭の中で逐次辿り、どこかに言い訳できる要素がないか必死で探す。

そして、場面はカミュを抱きしめたシーンに到達した。とても深刻な状況のはずなのに、痛みとは違ふ、疼きを感じ、ミロは驚く。

誰かを抱きしめるという行為など、数え切れないほどやっているはずなのに、カミュの体の感触が生々しく思い出される。こんな記憶は、初めてだった。

夜が明けてもカミュの体の感触はミロの記憶から、皮膚の上からは消えなかつた。

薄いカーデイガンの下にあつた、筋肉や、肘の硬さ。背中とその厚み。

もう一度、抱きしめられないだろうか？

そつと、気付かれないようにカミュの姿を探し、その体を視線でなぞる。

カミュが、ふつと、ミロの視線に気付いて視線を合わせようとする。

ミロはバネのように飛び上がった。カミュの視線を避けた。

椅子の倒れる音が、食堂に響いた。

数多の視線がミロに集中する。

オレ、絶対、おかしい——！

ミロは呆然とし、次に自分の犯した一連の行動を理解しようとする。これまでこの過去の自分のデータを脳内で閲覧していると、突然頭に激痛が走った。

気が付けば、いつのまにか手にしていた牛乳パックの中身を、アイオリアにぶちまけて、欠陥品扱いされている自分が居た。

数学の授業は十九世紀初頭に建築されたビッグ・スクールと呼ばれる校舎の一室で行われる。

生徒のカリキュラムの組み方で、同じ科目であっても取る授業枠が異なるクイーンズベリでは、アイオリアとミロは化学の授業は別だが木曜のこの授業は一緒で、他に、エドモンド・ハウ、マックス・グルーバー、アンソニー・スミス、ウォルト・パーシー、同室のカミュ・バローウも居て実に同じ寮の半数近くが席を並べている。

授業の半ば、スミス寮生宛に「極秘」と表書きされた小さく折り畳まれた書簡が整室を回り始めた。

アイオリアは手元に届いたそれを手早く机の下に隠して広げると、ざつと目を通し一筆その紙の上にペンを走らせた。

それを、机の下越しにミロの手に握らせて、その隣にいるカミュに回すように促した。

ミロがちらりと中を覗くと、内容は今週の土曜にマックス・グルーバーの自宅に集まってパーティーをするというものだ。

驚いた事に、既にミロの名前の欄には参加のチェックが付けられている。

今年一杯外出禁止の厳命をハウス・マスターから言い渡されているミロは眉を擡めた。

「いいから、はやくそれカミュに回せよ」

アイオリアがいつまでも紙を隣に渡さないミロの腕を肘で突付く。

あの、カミュを抱きしめてしまった事件から、丸一日経ち、ようやくフツウに見える状態で、こうして隣の席などに座ってられるくらいまでに頭の不具合も納まってきた。

それでも、やはりまだ自分からカミュに働きかけるには、残存する記憶が大きすぎて、躊躇い、時間稼ぎを試みる。

心の準備のためだ。

「だって、オレ、行けないぞ？　これ」

が、ミロの目論見は脆くも一瞬で崩れた。すつと、左からカミュの手が伸びて、ミロが握っていた紙を指先で摘むと、すつとそれを引き抜いた。

なんて長い指だろう。

ミロがぼうっと見とれている隙に、カミュのその指はさらに、紙に×の印を書く。

えっ？　と軽い驚きの表情で見詰めてくるミロに、カミュはそつと答えた。

「日曜は朝に聖歌隊の練習があるからね、土曜の晩に宿泊外出をするのは無理」

授業が終わって廊下に散り散りになる生徒達の間をすり抜けながら、ミロはアイオリアに詰め寄った。

一体誰が自分を出席としたのか、と。

「バカ。お前が最近ソンビみたいな顔してるから。それはお前の為に企画されたんだ。カミュはどうせ行けないから布団細工して見回りの目を誤魔化してくれ。オレはお前のお守り」

毎日の課題と、アンガスの厳しい発生練習と、演技に対する宿題で、確かにミロの頭は擦り切れるほどフル稼働していて、熱を持ってふやけているような状態だ。

アイオリアの言葉に、同級生の気遣いが心に沁みたミロだったが、明らかに規則違反に何も言わないカミュに困惑する。

「息抜きも必要だと思っつよ？」

一人であんな危険な真似をされるくらいなら、友人たちと一緒に規則破りの方が何倍もマシだ、という本音を隠してカミュは綺麗にミロに微笑んだ。

ミロは、カミュの笑顔はもう本当に信用の出来るものではないと知つてはいたが、まだ笑顔に向けてはくれるのだと正直ほつとした。

嘘の笑顔でも、冷たく拒絶されるより何倍もいい。一瞬、カミュと一緒に土曜の晩は残りたいという言葉が出かかったが、自分が邪魔で追い出したくてそうして勧められていた可能性もなきにしもあらず、と思いつたり、その言葉は出口を失った。

結局、最近すれ違い様に廊下で姫またはヴァイオラと呼び

掛けられて嘩される度に、シェイクスピアに追い掛け回されているような脅迫観念に駆られていたミロは、カミュは自分が居ない方がのんびり出来るのだろうと、思い当たり無断外出を執行する事にした。

当日、オーケストラの練習に参加していたマックス・グルーパー、アンソニー・スミス、ウォルト・パーシー、ミロ・フェアファックス、ミロの脱走を手助けしたアイオリア・エインスワース等は待ち合わせ場所に指定していた街のマクドナルドで待機組みのエドモンド・ハウ、ウィリアム・バンキン、マイケル・ガネット、ジョセフ・パーマー、アンドレ・リチャーズらと合流して夜食を買い込むと、そのまま歩いてマックスの自宅へと向かった。

マックス・グルーパーの自宅は、学校からバスで四十分、街の中央にある駅からは徒歩二十分という距離にあり、十分通学圏内だが本人の、どうせ通うなら寮生活を味わつてみたいという希望で親元を離れて生活している。

極めて近距離に実家がある事から、殆ど毎週末帰宅して何かと母親の手作り菓子やTV情報などを持ち帰り、スミス寮の談話室で重宝されている。

「今日はさ、ウチ、誰も居ないんだぜ！」

マックスが得意げに家の門の鍵を開け友人を招き入れる。

「お前、すつてえ家に住んでるじゃん……！」

ハウが口をあぐりと開けて、切妻屋根の下に広がる緑の芝生とバラの蔦がアーチを作る広い庭、車が二つは余裕で入りそうなガレージを指した。

既にオーケストラの中では、毎学期毎に新品のトロンボーンを購入しては蕩蕩を垂れるマックス・グルーパーはかなりのトロンボーンに違い無い、という噂が広がっていたが、ウォルト、アンソニーらはあまりにも思っていた通りの展開に顔を見合わせて苦笑を浮かべた。

一歩間違えば成金趣味と取られて煙たがられかねないマックスの行動は、彼のマニアックなトロンボーンへの偏愛と、トロンボーン奏者特有の繊細さと剛毅さが混沌とした性格のお陰で特にやつかみの対象になること無く、オーケストラのカオスの中にうまく溶け込んでいた。

「お前、家族が居ないのによく学校が外出許可出したな」

先のマックスの言葉を拾ってウォルトが尋ねる。

「ああ、オレ、殆ど毎週帰つてるだろ？ だからもう親がまとめて申請書作つていてくれていて、後は日付を入れてハウス・マスターに提出すればいいだけなんだ」

それでいいのか？

誰もが思ったが、その恩恵に預かる身としては何を言う必要があるだろう。

次々と家の中に電気を灯しながら、鼻歌を歌いそうな勢いのマックスに続いて少年達は行進を続ける。

冷蔵庫からソーダとジュース、棚からはグラスを持ってくるだけ。

大皿を何枚か持つて二階のマックスの部屋へと移動する。ざらざらとポテトフライ、チキンナゲットなどを皿に開けて、各自が取りやすいよう配膳する。車座に絨毯の上に腰を下ろして、なるべく自分の近くにフライドチキンが来るよう引つ張ってみたり、既にコーラのペットボトルを開け、一杯目を飲み干す者も居る。

階下からマックスが片手にワインのボトルを持つて現れ、全員がやつと揃い、かくしてジャンク・フード・ダイナー・パーティーは始まった。

「おい、皿、速いって」

「お前一度に食う量多過ぎ！」

「やつぱりオレもう一個バーガー買つときや良かったあ」

「あれ？ もうオレンジジュース無いよ？」

「おい、マックス！ トイレどこ？」

賑やかにファースト・フードでの晚餐を堪能し、腹もくち

ゴミ袋の中にも紙くすがこんもりと山をなす。

と、徐にマックスが立ち上がり少年達に空のグラスを持つ

よう示した。

「今日の集まりは秘密の大人の集まりだからな」

互いに赤いワインをそれぞれのグラスに注いでやりながら

他言無用の黙約を交わす。

全員に酒が回つたところで、マックスが「ドラム・ロール！」

と檄を飛ばした。

ハウが口でドラムの音を真似る。

マックスが後ろ手に隠していたVTRを少年達の目前に晒した。

「すっげーっ！ マジ？ こんな何処で手に入れたんだよ！」

「うわー…初めて見る…」

「こうゆうのつて、マジやつてんのかな？」

「オレ、初めて見るよホンモノ」

口々に無意味な奇声を発する少年達にマックスはこほん

と咳払いをして注目を集めた。

「これは、うちの兄貴が隠していたのをこないだ見つけたんだ

母さんに黙っているつて約束で借りとした。超レア物」

「超レアつて何がレアなんだよ?!」

「女の子がめちゃくちゃ可愛い……つて言っていた」

まだ自分も見えていないマックスは、少し答えに窮しながら

兄からの受け売りをそのまま友人たちに伝えた。

「ええっ…やつぱ！ もし出ちゃつたらどうするんだよ？」

着替えなんて持つてきてないぜ、という言葉を皮切りに、

また少年たちが騒ぎ出す。

その中で、ミロとアイオリアだけが静かだった。

「おし、ミロ。今日はお前を励ます会だからな！ お前はこ

真正面の特等席に座つてけ！」

ハウが騒ぎについていけないミロの腕をぐいぐいと

引つ張つて自分の隣にがつちりと座らせた。

それに刺激されて、賑やかな席取りが繰り広げられる。

テレビの最前列には、ハウ、ミロ、ウォルト、その後ろにジヨ

セフ、マックス、アンソニー、アンドレ、以上が床に腰を下ろし、ベッドの上にはウイリアム、マイケル。アイオリアは勉強机と対になっている椅子を引つ張つて来て、それぞれがようやく落ち着いた。

「おい、アイオリア！ お前そんな端からで見えるのかよ？」

ハウが最前列から元氣よくアイオリアに手を振る。

「オレはもう一回それ見てるから、気にしないでいいよ」

なにーっ？

裏切り者ーっ！

と、つぎつぎに上がる絶叫にアイオリアは眉を擡めて邪険に答える。

「うちのバカ兄貴に見せられたんだよ！ うるせえなあ！」

「で、どうだった？ やつばスゲかったのか？」

「そんな、これから見りゃ分かるだろうが……」

アイオリアは盛大に息を吐いて、まあ、確かに女の子はイイ線いつていると思う、と答える。

もう何度目かになるかされない絶叫の大合唱の中で、ミロはその煩さに顔を歪めながらウォルトを突付いた。

「なあ、これから何見るんだ？ ホラーとか殺人系だったらオレ、パスだぞ？」

ウォルトは、凍りついたようにミロを見詰め返した。

「お前、それ、マジに聞いている？」

眉間の皺を深くして見詰め返されたウォルトは、マックスを振り返って言った。

「おい、ミロの奴これから何見るのか分かってないぞ」

他の少年たちの視線もミロに集中した。

「……そつか……。ミロってまだ毛も生えてなさそうだモンな。こりうの見て痛くなるなんて事もねえんだよな……」

ハウがしみじみ言う、と、

「うっわー、それってある意味便利だよな！ オレ、ぜってえ我慢できねえ！」

「そうそう！ あれって結構痛いよな！」

「お子様にはわかんない苦しみだよなあ〜？」

きひひひひひ、と不可思議な連帯感がミロを残して渦巻く。

「いいの、いいの。気にしないで。大人の話！ ミロはお勉強に見てればいいんだよ！」

「何だよ、それ」

むくれてミロが答えると、

「だって、お前声変わりまだだろ？ ってことは毛もまだ生えてないし——精進だつてまだだろう？」

いいようにからかわられるだけのミロに、ウォルトが笑いながら助け舟を出した。

「え——？」

「だいたい時期が重なるんだよなあ、こりうのうつつて」

「え？ そう？ 僕は生えてくる方が早かったな」

「オレは出る方が早かったぜっ！」

「うっわー！ スケベだつ！ こいつスケベだつ！！」

「でもさ、それで言ったらカミュだつてまだつて事じゃない

か?」

カミュ、という単語がミロの耳に奇妙に響いた。

ついさつき舐めた赤ワインのせいか、ミロの体が、かつと火照った。

「そうかな。でもアイツの場合、なんかそれは在りえねえ感じしねえ?」

「そうなんだよなあ……。なんかもうみんな知っていますって感じだもんな」

「まさか、知っているだけじゃなくて、やつちやつてるって事はなないよな?」

「……まさか……。?」

幾つもの視線がアイオリアに集中した。

「おい、何でオレが、アイツが童貞かどうかまで知ってなきやならないんだよ?」

「だつたらお前はどうかんだよ! まさか……!」

「するかつ! この歳でつ!」

「カミュは……カミュとかポールとかはさ、きつと神様がなるべく遅くに声変わりをするように伸ばしてくれているんじゃないのかな……!」

喧騒の間を縫って、アンソニー・スミスの声がポツン、と響いた。

「……そう、かもな。あいつらつて、やつぱ特別だよな……!」

アンドレの呟きに、誰もが昨年暮れのポールとカミュのデュエットを思い浮かべた。

これきりだという悲壯感を乗り越えて、天を目指して高く飛んでいった二人の溶け合った歌声は、学校中の語り草だ。

突然、ミロの腕に、痛みが走った。

一週間前、カミュを抱きしめたその腕に、ぴりぴりとした痛みを感じる。

自分だけではない。他の同級生達だつてカミュとポールの関係は格別強く映っているのだ。

「そういや、あいつら最近前にもましてよく一緒に居るよな」

去年カミュと同室だつたジョセフが言う。

「ああ、ダンス大会でチームを組んだし、その後も照明の係りで一緒になつただろう? 三年の時は、ポールがカミュにまとわり付いていただけって見えたけど、ポールのやつ大人になつたよな。ダンス大会の後でもカミュの事ずつと心配して親身になつてやつてた」

ウォルトの言葉にミロは知らず唇を嚙締める。

支えたかつたのは、自分だつて同じなのだ。

ウォルトはそんなミロの様子には気付かず、マックスからビデオテープを受け取ると、二十三インチ画面のテレビの下にセットされているビデオデッキにテープを差し入れた。

ビデオは、微かな音を立てて黒く平たい箱型の機械に飲み込まれていく。

「これ、外部入力は何番?」

「三回そのボタンを押したら映るよ」

真つ暗な画面に、緑色のラインナンバーが映し出された。

「じゃ、再生ボタン押すぞ？」

シン、と静まり返った部屋に、唐突に女性の喘ぎ声が流れ出す。

暗く光を落とした部屋に、ＴＶ画面から放出された光があちこちに揺れて反射する。

一人として声を上げる者もなく、体さえ動かさずに画面に食い入る。

女性の乳房や耳や首筋に、愛撫を施していた手が徐々に下がりがり今まで少年たちが一度も目にした事のない部位が露になる。

息が詰まるような、喉を鳴らすような音があちこちから湧き上がり――

「なあ……、これ、本当によつてねえ？」

呆然とハウが呟いた。

女性の声はどんと信じられないくらい高くなり、うわ言のよさげに次々と言葉の口走っている。

男性の側は殆ど無言で、ただ激しく腰を女性の下腹部に打ち付ける音と、呻き声が響く。

二人の人間の横たわるベッドもギシギシと軋みだし、男の唸り声も大きくなった時、それは訪れた。

女性の悲鳴だ。

ビクリッ、と部屋の空気が動く。画面の中の音は高い喘ぎ声から、息切れの音に変わっていて、二人は折り重なって倒れこんでいる。

「……す、凄くない？」

ウィリアム・バンキンが魂の抜けた声を漏らす。マイケル・ガーネットの体はびつたりと壁にくっ付きビクリとも動かない。

「いや、やつぱ、こういうのつて、誇張が入るだろう？」

ジョセフ・パーマーが今年で同室二年目の頼れるウォルト・パーシーの顔を覗き込む。

女性の狂態よりも何よりも、自分達があんなふうに来るのかどうかが大問題だ。

生身の女性相手に本能の熱に焦がされた経験を持たない彼等にとつて、同じ男である男優のあの激しい体の動きこそがミラクルだ。

互いの反応を生唾を飲み込んで観察している間に、場面はバスルームに移り、今度はまた新しい女性が映し出される。

その女性は乳白色に染まったお湯の中に体を浸して、ゆつくりとカメラに向かって自身の体を撫で回している。塗れてびつたりと体に張り付いた髪は濃い茶色でゆるくカーブを描く。

顔立ちはきつい感じのする美人で、カメラは白く細い長い頸をクローズアップして、徐々に角度を下げていった。

浮かび上がった鎖骨、窪みに湯がうつすらと溜まっている。さらにカメラは下がり、湯に隠れた胸が映る、と誰もが思った時、女性自身の手がすつと自身の白い乳房を掬いあげた。

その中で紅く濡れている乳房がクローズアップされて、部屋

中に少年達の絶叫が木霊した。

いつの間にか栓を抜いたのだろう。バスタブの中の湯量がどんどんと減っていき、女性の裸体が露になる。

彼女は、両足をバスタブの縁に掛けて股を広げると、その中心に向かって淡く微笑みを浮かべながら手を伸ばした。

「うお——っ!!」

「何だよこれっ!!」

「すっげえっつっ!!」

もはや部屋の中は、チンパンジーかゴリラの興奮した群れの箱詰め状態だ。

「なにこれ、なにこれ! やっべえっつっ!!」

そうとうに知的美女、または少女とも言える若さの女性が、うつとりとした表情で自らを慰める展開に、少年達の心臓は跳ね上がり、脈拍は加速の一途を辿り、瞳孔が開く。

天気の良い昼間、という設定なのだろう。観葉植物を配した出窓から、時折風が入っては緑を揺らす。

掻き上げられていた女性の髪がバサリと落ちる。

「あ!」

短い叫び声が上がった。

「なんか、カミュに似てないかっ?!!」

画面から目を離さず、ハウが言った。

肩より少し下にかかる長さの髪は、額の上で二つに分かれて柔らかく弧を描きながら頬のラインを撫で、濡れた肩にびたりと張り付いている。

そして、幾房かの後れ毛が短いアーチを作って白く広い額を隠す。

「いや、カミュって言うよりは、ボールの持っていたあの天使の絵葉書に似ているよ——な? ミロ」

ウォルト・パーシーが深く腕を組んで、かつてその絵を見たことがあると言っていたミロに話を振る。

だが、ミロは心臓を鷲掴みにされたような息苦しさで痛み、チカチカする視界に何も答えられなかった。

折角、一週間前の混乱から立ち直りかけていたのに、今、目の前に広がっている映像は、なんなんだ?!

似ている。

確かに、カミュに、というよりはあの天使の絵に似ているはずだ。

だって、性別が違う。

カミュは男で、こっちは女だ。

年も違う。

体だって、抱きしめたカミュに、あんな胸なんかありはしなかった。

それなのに……。

ビデオの中では、既に相手役の男性が登場しており、立ち

上がつて壁に背を預けた女性は苦しげに片足を男性の腰に絡ませて体を揺さぶられている。

唇を柔らかく半分開いて、茶色の瞳が、聞こえてくる声は苦しそうなのに、どこか綺麗に見えてしまう。

肩にしがみ付いていた細い腕が男優の首に巻きつき、掌が首を撫で上がる。

指が、男性の黒い髪の中に消えてゆく。

そして、まるで自分の唇に押し付けるようにして窒息するのではないか、という口付けが展開される。

似てない。

似てない！

絶対に、似てない！！

そう言い聞かせるのに、頭は勝手に女優の顔をカミユの顔に変えて見せた。

何か猛烈な異常事態が、脳味噌の中で起こっている。

ミロは、目の前が真っ暗になる程の空ろろしさを感じた。

この異常事態の直し方が――

分からないっ！！

体中の水分が熱に飛ばされる。乾いた喉と早鐘を打つ心臓を押さえたくて、ミロは握り締めていたグラスの中身を一気に飲み干し、意識を失った。

グラスの中身は赤ワインで、そのアルコールが、ミロに最期の一撃をお見舞いしたのだ。

明け方の始発バスで、みなより一足早く帰寮したミロとアイオリアは、留守番のカミユ・パロウに裏口のドアの鍵を外してもらって、忍び足で二階の自分達の部屋に戻った。

鳥たちは忙しく鳴き始めているが、生徒たちが起き出すのはもう少し後だろう。寮内は物音一つしない。

「どうだった？ 少しは気晴らしになった？」

ドアをしつかりと閉めた後、カミユは笑って二人の友人を振り返った。

冷たい朝の空気の中を歩いてきたアイオリアは、さっさと服を寝巻に着替えてベッドに入る準備をしながら答える。

「ま、みんな喜んでいたよ。お子様ミロには刺激が強過ぎたかもしれないけどな」

アイオリアの答えに、カミユが怪訝な表情を浮かべてミロのベッドを見ると、彼は既に着替えもせずに枕に顔を押し付けて寝台の上に突っ伏していた。

「何があつたんだ？」

「アダルトビデオ鑑賞会」

ああ、それで……と今までには言わず、カミユはくすりと笑ってミロから視線を外した。

「お、暢気に笑ってるけどな、お前、マックス達に会ったら暫く大変だぞ？」 あいつらビデオの中の女優の一人がお前に

そつくりだつて大騒ぎしてたからな」

にやりと笑つてカミュをからかつたアイオリアに、

「それは、光栄だな。美人に似ているつて言われるのは悪い気はしないよ」

自分の顔に広がるそばかすを指してカミュもにつこり笑つて答えた。

「ははつ！ お前らしいや。でもどうして美人だつて分かるんだよ？ ああいうのは顔じゃなくて体重視だぜ？」

「マックス達が顔じゃなくて体重視の成熟の域に君のように達しているとは思えなかつたから、ただの勘だよ」

「お前も言うな。でも、これを言つたのはオレじゃなくてウチのバカ兄貴だからな……、つて、お前ももう起きるのか？」

「うん。昨日は早くに寝たからもう眠くないんだ。もう少ししたら食堂も開くし、先に下に下りて早めに聖歌隊の練習に行くよ」

「練習つて、またカミュ、ソロとか歌つてる？」

今までだんまりだつたミロが突然跳ね起きて大声で尋ねた。

その顔は奇妙に赤く、瞳孔が開いている。

アイオリアは、静かにしろよ、と注意の言葉を発しつつ、布団に潜り込んだ。

カミュは、ミロの突然の質問に驚き、またその真つ赤な顔にびつくりしたが、取り敢えず先週末の怒鳴り合い以来、少しづつ気まずさの海から浮上しつつあるミロに協力するべく答えを返した。

「いや。普通に、ミサで歌う賛美歌の練習をしているだけだど……」

「でも、その練習中に一人で歌つたりする事はないのか？」
なぜか必死の形相で聞き返すミロに、カミュはいつものミロと違うものを感じて少し戸惑つた。

「いや、そういう練習方法はしないな。パート毎に分かれて歌つたりする事はあるけれど……どうして？」

ミロは、一瞬間を伏せたが直ぐにそれを上げてカミュを見詰めて言つた。

「もう一度、去年のクリスマスみたいに、カミュが歌うの聞けないかな？ 交換条件が必要なら、何でもいいよ。一人で歌うのは好きじゃないんだろ？ だつたら、今日とか練習を覗いたらまた聞けないかな——」

カミュは、笑顔を消してまじまじとミロの顔を見詰め返し、やがて丁寧な言葉を選びながらミロに語りかけた。

「あれは、もう二度と出来ない。あの時の僕の声は相手がポールだつたからあそこまで出来たんだと思う。だから、ポールが声変わりをした今は、きつともう同じようには歌えないし、それに、僕は……、僕のあの声はポールのものだと思つている」
多分、それは、やさしい顔だつたのだろう。

なるべくカミュは、やさしくミロに伝えたかつたのだろう。
でも、その穏やかな表情の下から、真剣な、カミュという人のもつとも核に近い部分にある、彼の誠実さが抑えようもなく浮かび上がつてきて、セイヤーの天使の絵とシンクロを

起す。

そして、

濡れた髪を額に張り付かせて、うつすらと口を開けてセックスをしているカミュが出現する。

ストップだ！

ストップだ！！

絶対にストップしろっ！！

ミロは、暴走する壊れた脳に向かつて渾身の力で命令した。

その頭に、バシッ、と何かがぶつかって、ミロはベッドの上に薙ぎ倒された。

「ストップするのはお前のその馬鹿デカイ奇声だっつ！！ 酔っ払い！！」

枕を片手に掴んだアイオリアが、肩で息をしながら仁王立ちし、ミロを睨みつけていた。

ミロは、はっ、と我に返る。

心の中で叫んでいたつもりの声が、実際に出ていたらしいのだ。

凄く、恥ずかしいぞ？

けれど、そんな恥ずかしさより頭の中に一瞬に浮かんだ映像の影響の方が遥かに強かった。

だめだ。

きつと起きているからいけないんだ。

「……ごめん。オレ、寝る」

ミロは、見開いていた目をパチンと閉じると、バタリとベッドに倒れそのままピクリとも動けなくなつた。

カミュも目の前で起つたことに対する理解が付いていかず動けなかつた。

体を動かす機能を情報処理に回してもまだ理解できない。「カミュ、理解しようとするだけ無駄だぞ?! こいつ完全にビ

デオ見えてからネジが百本単位でこっそり抜け落ちてスクラップ寸前の上、たつたグラス一杯の赤ワイン飲んでくらくらいで卒倒した酔っ払いだからな！」

「あーうん」

カミュは、大人しくアイオリアの忠告を受け入れ、早々に外の空気を吸いに行つた。

深く早朝の冷たい空気を吸い込み、意識の端に残つた潤んで見上げられた青い瞳の色を記憶から消去した。

「あれ？ どうしたの？ 元氣、全然ないね？」

月曜日の放課後、ぼうつとLL8教室で立ちん棒をして自分を待っていたミロの、いつもにもましてぐちゃぐちゃな頭を、アンガスは、つん、と人差し指で押した。

ぐらり、とミロの頭が大きく傾ぐ。
「え？ おい?!」

慌てて肩を支えたアンガスに、やつと視線を合わせたミロは、頭をぶるぶるつと振るつて、大丈夫と答える。

——なるほど、この調子で一日ぶるぶる頭を振っているとか、こういう髪型になるわけだ。

配役が決まつてから、ミロは実行委員会から散髪を禁止されてる。

冬の間、髪を切つた後の寒さを疎んでおつくうがつていたことと、ついついクリスマス・プレゼントなどに小遣いを使つてしまつたミロは実に半年以上も髪に銕を入れておらず、最近では鳥の巣を通り越して金色の綿鉈状態である。

「もつちよつとさあ……なんとかならないのかねえ……ヒロインなんだからさ……」

アンガスはミロの猫毛に手櫛を入れようとして、ミロの頸をがくんと折つた。

「——まあ、これは後でどうにかしよう」

早々になんとかしよう、という気持ちを放棄して、アンガスはミロの腕を引いて教室の一角に移動する。

ミロは部屋の間にある倉庫の扉脇に立たされた。アンガスは倉庫の中から等身以上の四角い板を引きずり出した。

鏡だつた。

「まさか、この前に立つて、で、自分を見る。ヴァイオラになつて、その姿を自分で確認して」

促されて、ミロはじつ、と鏡の中の自分の姿を見つめた。

鏡には、口をへの字にして、眉根を寄せた、いかにも自信のなさそうな「自分」が映つている。

「うん。これが、今の君の「ヴァイオラ」だね。よく覚えておくといひ」

そういうと、アンガスは深く腕を組んで床の上に胡坐する。

なにやら考え込んでいるようなその様子に、ミロは居心地の悪さを覚えたが、アンガスがびくりとも動かない以上、鏡と彼の間でただ待つしかない。

数分が経過した頃アンガスはやつと顔を上げてミロを見た。

「君、シェイクスピアの時代、女性は舞台上に上がれなかつたつて知つてゐるかい？」

演劇に特別な興味を持つたことの無いミロはもちろんそんな事は不承知で、けれどただ知らないと言で返すのも憚られ、ただアンガスを見下ろした。

そんな事は考えてみた事もないし、どうしてそんな事をアンガスが尋ねてくるのかも分からない。

「シェイクスピアの時代はね、女性が舞台上に上がる事が禁止されてた。エリザベス一世の時代だね。だから、女性の役は

たいいてい少年がやるのが当然だつた。その後、ピューリタン革命が始まつて、劇場は閉鎖される。実に、シェイクスピアの

死後五十年を経てチャールズ二世の治世が始まるまで、職業女優は存在しなかつたんだ。

今も、国によつては舞台上に女性が上がらず、男性が女形と

して存在する国もある。

これは、大別すると二つの意義を持つている。

一つ、男性が女性を演じる事が可能であるという事。

一つ、男性が女性を演じるというのは、あくまでそれは一つの表現形態であつてその行為自体は恥ずかしい行為でもなければ、男性が男性の役を演じる事と比較して蔑視される行為でもない。」

アンガスは、これまでに見た事がない真剣で底冷えのする、十も二十も大人びた表情でミロを見上げた。

「僕はね、舞台の上でもっとも恥すべき、そして酷評されるべき行為は中途半端である事だと考えている。

鏡の中の君は、僕には心を込めてこの役をこなす事に未だためらっている者の姿としか見えない。いつまでたつても巧くいかない。自信喪失の結果として自暴自棄になつて大げさな演技でそれを誤魔化す。悪循環だ。

自信がないのは、そんなの当たり前だ。やる前から自信のある人間なんてただの傲慢だ。自信は今日自分で作つていくものでしか作れない。未来への賭けや夢想からは作れない。

昨日やつた演技、今日できた演技、その全てが自信への一歩でもあるし、改善点を見つける為の唯一の方法だ。

恋だの愛だの口にするのが恥ずかしい、こんな恥ずかしい台詞なんて気持ちを入れてなんて言えない、愛なんて分からない、そうやって過ごす毎日に、君は一体幾つのチャンスをお逃しているか気付いているのか？

この一ヶ月と少しかけて、君が手に入れたヴァイオラは、その程度のヴァイオラなんだ。君、音楽をやっているなら分かるだろう？ それが君の作品なんだ。スミス寮が入賞できるかどうか、そんなのはどうでもいいことだ。

それよりも、そんな中途半端な作品を、君は人に見せるつもりなのか？ 聞かせられるものなのか？」

びくりとも動けずに固まつているミロに、アンガスは鏡へ指を指す。

「君と同年生のアンソニー・スミス。彼は侍女のマライアの役でスカートを履く。

衣装というのはね、記号なんだよ。

豪華な衣装を身にまといれば金持ちだし、僧服を着れば坊さんだ。そういう意味で、アンソニーはスカートを履く時点で半分はその役を表現してしまえるんだ。

ところが君は、本当は女だけれど、男を演じる男なんだよ、分かるかい？ この不利な状況、君には衣装によるサポートは全くない。

極端に言えば、いつもと同じカッコをしたまま、女の子として観客の目を引くんだよ。

つまり、根本的に、しっかりと君の中で何かを変えてもらわなきゃ、よく長い台詞を暗記しました、で終わる藝芝居になるわけだ。

もちろん、それだつて構わないんだよ？ 君がそれで満足出来るなら……。」

アンガスは、ふうつと息を吐き出した。そして、また暫くじつと何かを思い詰めたような表情を浮かべてから口を開いた。

「本当はさ、ヴァイオラは僕がやる予定だったんだ。テスが直接頼みに来てさ。君は当然今まで通り上級生の意志なんて撥ね退けるだろうと誰もが予想していたし、みんな演劇大会では本当にいろいろ結果を出したい、っていうので僕のところへ話が来たんだ。」

プロの世界で、ヴァイオラを男が演じるなんて事は、もう可能性ゼロに等しいからね。面白そうだと思つて僕は引き受けた。

そうしたら、君がヴァイオラを演じるつて言い出しただろう？ みんなはお祭り騒ぎで歓迎していたけれど、実は内部では揉めたんだよ。演出とか、台本とか、チーフリーダーの中ではさ。」

ミロは今まで知らなかった事実に、ただただ黙つてアンガスの話の続きを待った。

アンガスは、ばざり、と額にかかると髪を片手で払つて言つた。「演劇指導の教官や、テスなんかは君には無理だつて言つていたんだ。訛りも矯正しなきゃならないし、そもそも君、演技に向いている性質の人間には見えないから。」

でも、僕が、交代を申し出たんだ。

僕はね、去年のクリスマススの聖歌隊のコンサートで、何より君の音が深く印象に残っている。リッジウェイの音が止まつて、誰もが諦めたとき、君の音だけがなお力強く道を示した。

僕にはあの音は、美しい世界を、芸術を守る事に賭した創造者その者の姿に見えた。

僕らの創るものは、創り上げた端から消えていく。三次元上には留まる術を持たない。ただ見るもの、聞くものの心のみ残るんだ。

芸術と呼ばれるものなんて、生きていくために必要不可欠なものじゃない。人間はそれなくしても生きていける。

けれど、僕たちは違う。一度その深遠を覗いてしまつたら、伝えたい、表現したい。創造されたものの熱を感じてしまつたら、どうしてそれを無碍に出来る？ どうしてそれをいい加減に表現出来る？

僕たちは知っている。この作業には果てが無い。完成・完璧な表現などありはしない。けれど、誰もがそれを目指して極みを目指して進むんだ。

リッジウェイも、バローウもそうして歌つていただろう？
そして、君はそれを無様に終わらせる事なんて出来なかつた——。

そんな君となら、いい舞台が踏める、と思つたんだよ……。誰より真剣に挑んでくると、そう思つたんだ。君なら、どんなヴァイオラを演じるのか、見てみたかつたんだ。」

ミロは、アンガスから視線を外せなかつた。そんな風に、あの時、自分の音を聞いてくれた人が在つたなど、考えた事もなかつた。

ミロとアンガスの視線はびたりと重なつたままどちらから

も外されず、時計の針の音だけが時が止まっている事告げていた。

それから三時間、ミロは必死でサガの顔を思い浮かべた。サガに語りかけているつもりになって、台詞を口にした。

それでも、やはりOKは出ない。

あまりの情けなさに、ミロは目が眩みそうだった。

「ヴァイオラはさ、女の子として大公の側に行きたいんだよ。でも、大公が気に入っているのは小姓としての自分だ。側に近付きたいけれど、本当の自分じゃ側に近付くこともできない。その上、大公の恋も応援しなきゃいけない。」

結構シビアな状況だと思っただよね……こう、物悲しさとかさ、漂っていると思っただよ。」

アンガスは深く息を吐いて、僕にはこれ以上どう君に助言できるのか分からないよ、と呟いた。

「僕には、君にはサガの事を思い浮かべて演技するというのがいいアドバイスになると思っただけれど、君の心は頑として開きやしない。もつとき、自分を解放しないとダメなんだよ。観客に向かって、全ての人に向かって自分を曝け出さなくちゃ……。」

曝け出すって事は、何だか物凄く心もとなくて、演技している事が人に見透かされている状況は居心地が悪い。けれど、本当に表現者がする事は、その先の事なんだ。

開いて、その奥にある普段一番自分が守っている自分で勝

負するんだ」

アンガスは、苛立ちを滲ませた表情で空に向かって言葉を吐いた。

「自分に人を注目させること、惹き付ける事、それは、恥ずかしい行為でもなんでもないんだ。」

僕たちは、感動を一人でも多くの人に受け取ってもらうために、ありたつけの力と方法で、人を振り向かせなきゃいけないんだ……」

悔しそうに、だんだんに俯いていくアンガスに、ミロはいたたまれない思いを味わう。

アンガスが、一生懸命に自分に伝えようとしてくれる熱意、彼の話す言葉の意味は分かる。けれど、それを結果として表せない。

黙ってL18教室に鍵を掛けたアンガスの後ろについて、寮への道を進む。

アンガスの踏みつけた芝が、その弾力でゆつくりとまた頭を擡げる。

巧く弾きたい、という事と、上手く演じたいという感情は似ているのだろうか？

練習したからといって満足な演奏が出来ないときは、何が間違っているのか？

真剣さだろうか？
もつと練習すれば、いつかは満足できる演奏ができるのだ

ろうか？

違う。

心が、曲に添わなければ、満足のいく音なんて奏でられない。何度も言葉を愛え、状況を変えて説明されて来たアンガスの指導をもう一度頭に思い浮かべる。

アンガスの解説するヴァイオラ、テスの注文するヴァイオラ、どれも結局他人の思い浮かべる曲のイメージで、それは自分ものではない。

何か共感出来る箇所はないかと、ミロは一心にヴァイオラの言葉を捲る。

本当は、大公の側に居たいヴァイオラ。大公の、公爵への思いなど手放して喜んで聞ける気分じゃないだろう。

この声は、ボールのものだなんて告白聞きたかったわけじゃない。

ミロは、はつとして足を止めた。

東の空の端にうつすらと残る夕日の鈍い残照が世界を照らしていた。

このまま、ずっと、ボールとカミュは仲良くくつつついて、カミュからの本気からは締め出されたままで、このままあと三年間のパブリックを過ごし、さよならをするのだろうか？

大公の台詞が耳に蘇る。

『お前、恋をした事があるか？』

恋は、した事はない。

恋愛なんて、分らない。

けれど、このままで居るのは、終わるのは嫌だ。

近付きたい。

もつと側に行きたい。

恋ではないけれど、大公を慕うヴァイオラの気持ちは、分かるような気がした。

『はい、いざさか覚えがございます』

ヴァイオラは、そう答えるのだ。

黒い樹木の影の上に、星影が揺れていた。

誰が、中途半端な出来の曲なんて、人に聞かせたいものか。

誰が、人の心に届かない演奏なんてしたいものか！

やるのなら、誰もを圧倒できるモノを作り上げるまで

だ——！

選択音楽で、散々やりあつたカミュとの光景が浮かぶ。

何より、カミュを納得させる、カミュを落胆させないモノを、創り上げなければならぬのだ。

無意識に、拳を握り締めたミロは、毅然と前を見据えて歩き始めた。

本番二週間前、どこの寮の学生も学期末試験とスピーチ・

デイの準備に追われている。

スピーチ・デイのメイン・イベントは演劇大会だが、他にも芸術コースの生徒等による作品展、プラス・バンドのミニ・コンサート、クリケットの模擬試合、など日頃の生徒の成長ぶりを親族に確認してもらう為の、学校にとつては一年に一度の最も重要な日だった。

スマス寮でも、ウイリアム・バンキンはセラミックのコースで、エドマンド・ハウは絵画のコースで作品を出展する事になっているのに、まだ仕上がりず連日美術室で遅くまで作業している。

そして、ミロ・フェアファックスは、ようやく演劇の団体練習に復帰する事になった。

ミロの復帰の試験を行ったテスは、格段に滑らかに、感情表現も追加されたミロの演技に思わず、何か違う、でも軌道修正出来ない?! だが、役者がそういう表現をしているのだから、これで突っ切るしかないのか?!

と苦渋の決断を迫られた。

ミロのヴァイオラは、テスの求めていた儂く美しい少女の香りは一切せず、自分の想いの強さに戸惑いながらも、しっかりと大公の目を見つめる意志の強い毅然としたヴァイオラだったのだ。

それは、ヴァイオラという少女の一途さでは無く、ミロという少年の一途さに見えた。けれどそれは、かつて月明かりに照らされた踊り場でカミュを魅了したように、見る者を引

き付けずにいられない類の純真な熱だった。

サガ・チエトウィンドはそんなミロのヴァイオラにそっと微笑み、アンガスはようやくと胸を撫で下ろした。

ミロは髭剃り道具も持っていないがブラシも持っていない。そろそろ衣装合わせもやろう、という段階になって、ミロのあまりにもぐちゃぐちゃに髪の毛に悲鳴を上げた衣装班は、次の衣装合わせまでに付け毛を綺麗に付けられるよう髪を整えてくるように、とミロに命じた。

仕方なく、部屋に帰る途中、談話室に居たハウに髪を梳かす道具を貸してくれと頼むと、面白がった友人たちがめいめいの櫛やブラシを持ち寄ってミロの頭にそれを通す。

「すっげえ! 全部ぶら下がってるよ!」

騒ぐだけで一向にミロの髪が解れる様子はない。それに業を煮やしたミロがハウのブラシを引つ掴んで部屋へ戻ろうとする。

「止めろよっ! それ高いんだぞっ!」

と泣きつかれ、結局ウォルトが、三ポンド七十五ペンスで学校の売店から購入したプラスチックのブラシをミロに貸す事になった。

部屋に帰って、四苦八苦しながら自分の髪を解しているミロを見て、

「何やってんだ？ 爆発してるぞ、髪！」

と仰天したアイオリアが助つ人に入り、ぐいぐいとミロの髪を引つ張つているところに、図書室で照明の勉強をポールとしていたカミュが帰つてくる。

今回、カミュはかなり熱心にこの照明という光の演出技術に関心を抱いており、他の照明スタッフと積極的に会議を開き色々効果的な演出方法を模索しているらしい。

お陰で、当初イタリアの雰囲気を出すために色々な書割が予定されていたが、それらが一切なくなり、シンプルで黒い長方形の幾つもの筐体と一本の柱、それに繋がるバルコニーだけで舞台は構成される事になった。

音響班もイタリアの古典器楽曲、古歌から数曲をピック・アップし共に演出を図る。

「何をやってるんだ？ 君たちっ？」

さて、ドアを開けて直ぐに目に入った光景に、カミュは嘩然とした。

ベッドの上で丸くなつて痛みに耐えているミロ。その金色の頭を枕に押し付けて、バリバリと音を立てながら力ずくでブラシを下に引きずりおろそつとしていたアイオリア。

一体何事か。

「明日の総合練習までに付け毛をくつつけられるくらいに髪をまともにして来いって言われたんだと。でも、ひつでえのこ

いつの髪。お前の頭は羊毛かよっ」

アイオリアは些が上気した顔を上げてカミュを見、額の汗を拭つた。

カミュはちらり、と腕時計で時間を確認すると、すぐに小脇に抱えていた資料を机の上に置くと、ベッドの下から自分が使っている洗髪剤のボトルを引つ張り出し、言った。

「アイオリア、今からミロを連れてダグラス先輩の所に行こう」
寮長はバスルーム付きの個室を与えられる。

このまま乾燥して傷みきつた髪を、ブラシ一本で梳かせざるものではない。

そう判断したカミュは、使用制限を過ぎたシャワールームの代わりとして、寮長室のそれを使わせてもらえないか、交渉すること考えたのだ。

階段を駆け上がるカミュを追い、アイオリアは何がなんだか分からないままミロを引きずつて走る。

「先輩、こんな時間に済みません。カミュ・バローウです」

重厚な樫木の扉がカミュのノックの後に開き、ミス寮の寮長ダグラス・コックスが驚きを隠さず扉の向こうで固まっていた。

「こんな時間に済みません。十分ほどバスルームを貸して頂きたいのですが……」

普段、模範生中の模範生として振舞っているカミュのつっぱな申し出に、ダグラスは一瞬返答に詰まった。

「あ、ああ……。もしかしてフェアファックスか？ どうした

んだ、その頭は——？」

「済みません。どうしても明日までに整えておくように言われて、ですが僕等がバスルームを使える時間は過ぎてしまっているの……」

凸凹と四方八方に伸びる金髪の頭と、うつすら涙の滲んだ青い目で立っているミロ、しっかりとミロの腕を掴んで、もう一方の手にはブラシを握り締めているアイオリア、シャンプーとコンディショナー、そしておそらく整髪剤の入ったボトルを抱えて髻め面に立っているカミュ。

ダグラスはその異様さに圧倒されて、どうぞ、という言葉しか口にする事が出来なかった。

「あつつついつつ！ 頭に沁みるっ」

「アイオリア、君、一体どんなバカ力で髪を梳かしてたんだけ？」「だって、ぜんぜんびくとも動かねえから、そいつの髪の——！」「つくそー。だからハウのブラシ借りましたのに……！」

「お前な、あいつの使ってるブラシいくら知ってるのか？ あいつ髪薄いの氣にしているから血行をよくするとかなんとか医療用の特別なの使ってるんだぞ？ 貸せるか、お前ごときにっ！」

ミロは、タイルの上に直接座り込みバスタブに首を折り曲げて頭を突っ込んでいる。

その左脇にシャワーを握るアイオリア、右にはカミュ。あのビデオ鑑賞会以後、すっかり平常心でカミュと対峙で

きなくなっていたミロは、自分の右肩に感じるカミュの氣配にぎゅつと目を瞑って耐えていた。

最初にぎゅつとお湯をかけられ、その次にシャンプーを泡立たせる。

カミュは腰から上半身を折り曲げて、両手をミロの泡だらけの髪の中に突っ込んでいる。

額から頭頂部、耳から頭頂部、と規則正しく指の腹でミロの地肌を撫でるようにカミュは指を動かしていた。

カミュの指の腹が、後頭部に回る。指の腹が皮膚を押し、まるで頭蓋骨の形を確かめるようにゆつくりと、撫で上がる。

カミュの、ピアノを弾く指、オルガンを奏でる指が、全て今ミロの金色の髪の中に埋め込まれ——。

ぞわり、とミロは腰から湧き上がる感覚に震えた。

目を瞑っている分、カミュの指の感覚がいつそう感覚に訴える。

指を、深く相手の髪に差し入れて、頭を引き寄せ夢中になつてキスをしていた二人。

あの女性の指と、ピアノの白い鍵盤の上を自由に走るカミュの指を重ねてはいけない。

そう思うのに、一度集中してしまつた意識なかなか外せず、

ミロは、歯を食いしばった。

「何か手伝おうか？」

ダグラスの声が少年達に尋ねた。

鼻の頭に汗をかいたカミュが、すつと腰を伸ばしてもうすぐ終わるので、応えると、

「髪、乾かすんだらう？ ドライヤーがあるから使つていいよ」

ダグラスの申し出を、カミュは有難く受け取った。

「だいたい、ミロは髪を洗うときでも石鹸を使つて後はそのままだらう？ それを急に解そうとしても無理なんだよ。髪自体が細いし、乾燥して滑りも悪くなつている。トリートメントでもした後に無きやそうは簡単に解れないよ……」

珍しく大人しく、されるがままになって、目をぎゅつと閉じているミロを、カミュは浴槽の淵に腰掛けさせた。

そして、丁寧にタオルで髪の水気を取る。

さらに指先にジェルを拵つて、もつれてボールのようになっていた部分にそれをすりこみ丁寧に毛の塊を解す。

アイオリアも反対側に回つてそれに倣う。

あらかた解れそうなところを解した後、一番弱い風量に設定したドライヤーでゆつくりと毛先の方からブラシを当てて梳かしていく。

「お、すげえ。まともになつてきた」

アイオリアが感心する。

「ミロ、どうしても解れなかつた所はもう切つてしまふよう？」

カミュは大人しくしているミロの返事も聞かずにさつさと

鋏を金色の波の中に入れる。

ミロは、じつと息すらしていないのではないかというくらい静かだ。

「髪、結構折れていてそれが変なポリウム出しているから、少し梳くよ？」

再度カミュはミロに宣言し、これまた返事の有無を待たずに、器用に鋏を縦に入れて広がり調節する。

「お前、器用だな。——ていうか、慣れてるのか？」

アイオリアが、黙々と動く鋏捌きを見て興味津々でカミュに尋ねる。

「昔ね、弟が四歳の時かな。イスターにウサギを欲しがつて両親が買つてやったんだよ。でも、弟はすぐに世話に飽きて、長毛種のウサギで、毛の手入れをしてやらないと腹に毛が溜まりやすいんだ。で、ちよつとトイレの掃除とかサボつた結果、お尻が爛れちゃつたりして、毛を切つたんだ。その後も曇りでバテたり、年を取つてからは皮膚が弱くなつてきたりして、わりと小まめに毛をカットしていたんだ。毛球症を防ぐためにも」

「へえええ。お前の面倒見の良さつて子供の頃からなのな。うちにウサギなんか来たら、絶対にそれライプストック扱いだな」カミュと、一つ年下のアイオロス・エインズワースをよく知るダグラスは、浴室を覗き込みながら笑い声を漏らした。

しかし、ミロはビクリとも動かない。

「お前、随分大人しいな」

アイオリアが尋ねると、彫像のように表情も硬く動かさな
いままミロは応えた。

「髪の手を弄つてる時に動くのは危険なんだ」

まさかカミュの指の動きから気をそらすために、必死の思
いで目を閉じて、パガニーニのカプリスを頭の中で弾いている、
とはいえず、適当な事を心える。

「は？」

「羊の毛刈りだつてそうだ。動いたらいくらうまく刈つてやろ
うとしても血が出る」

「お前、自分が羊と同レベルって分かってるんだ、一応……」

「それだけじゃない。母さんが耳を切った。オレの」

「は？」

「じつとしてなかったら、耳切られた。母さんに。子供の頃」

激しく噴出してアイオリアは床に転がった。カミュも、一
瞬手が止まった。ダグラスは、扉の向こうから聞こえてくる
少年たちの聞き飽きないやりとりを、体を折り曲げて笑つて
いる。

「笑い事じゃない」

口だけを動かして、俯いたまま喋るミロに、カミュだけが
相槌を打つ。

「それで君あまり床屋に行かないんだね」

「別にそれだけの理由じゃないけど……」

一通り形がつくと、カミュはさっさと荷物をまとめ、ゴミ
を片付けてダグラスに礼を言い部屋を辞した。

アイオリアとミロも、丁寧に礼を言つて部屋を後にする。
その三人の後姿を見て、ダグラスはカミュは完全に復調し
たな、と安堵に胸を撫で下ろしたのだった。

翌日の水曜日、朝のスミス寮の食堂では、ミロのイメージ、
チェンジが話題の大輪を咲き賑わつていた。

幾分しつとり落ち着いた巻き毛は、いつそう金の色合を濃
くし、ただ好き放題に跳ねていた髪は、形の良い小さな頭部
の周りをふわふわとゆるやかなカーブを描きながら零れ落ち
ている。

「ホント、これで口さえ利かなきゃ天使。美少女だよお前」

記念に写真とつとくか？ と声を掛けられる中、ミロはい
つものようにシリアル、ヨーグルトとフルーツ、牛乳をトレ
イに乗せ、さてアイオリアたちのいるテーブルに向かおうか
と方向を変えた途端、後ろからそつと首に手を回され、ギョッ
とした。

「おはよう。やつとまともになつたな」

アンガスだった。

「おはよう」

とミロが返すと、アンガスはしげしげとミロの髪型を眺め
た後、クンと鼻を髪に近づけて目を細めた。

「匂いがいづつもと違うね……。自分で買ったの？ それとも誰
かに貸りた？」

にっこりと問われ、ミロは喉が詰まった。

「なぜか、カミュの名前を、言いたくなかった。自分で買った」

小さな嘘を付く。

「ホント？ そんな上品な香りのコンディショナー、うちの購買部に置いてあつたっけ？」

首を捻つて考え始めたアングスの側を、ミロは慌てて離れた。どうして正直にカミュが貸してくれた、と言わなかつたのだろう。

と考えた側から、だつて、あれは貸してくれたんじゃない。カミュが、自分の髪を――。

その後も、ゆく先々で髪型の事を言われるたびに、ミロはカミュの暖かな指のやさしい感触を思い出し、赤くなる顔を持って余した。

午後になり、その日は裏方の人間も含めて半数以上の人間がシアターのメインホールに集まつた。

太道具運び込んだり、音響テスト、ライティングのテスト、役者は始めて本番と同様の衣装を身に着けて稽古に挑む。

「時間が無い！ とにかく進めるだけノンストップで行くぞ！」
テスの掛け声で全ての動きが停止し、照明が落ち、そして

舞台の中央に熱気が集中した。

音響がリユートの調べと甘いアルトの女性の歌声を流し、ピンスポットライトが舞台中央を照らす。

ゆつたりとした長い上着を身にまとい、ワイニンググラスを片手に物憂げに寛ぐ大公。

オーシーノ公

『音楽が恋の糧ならば、もつと続ける。

これ以上は入らぬほどに食せたならば、

いつか恋する気持ちも衰えてやがて消えてゆくかもしれぬ。

今の曲を、もう一度――』

これが、舞台「十二夜」の始まりの合図だった。

リハーサル中休みの時間に、学生たちは慌しく様々なことを点検する。

ライトは眩しくないか、声は舞台の端まで届いているか、音は役者の声に被りすぎでないか。

照明担当のカミュもグループで集まり、細かく台本に照らし合わせながら進行を確認する。

「出だし、もつとポーターライトは時間をかけて舞台全体を照らした方がいいだろう。音響でBGMを流しているし、すぐに砂浜にシーンが変わる」

「アップパーホリゾントライトとローホリがところどころズレてた。後でまたタイミングと合わせを確認してくれ」

「サイドスポットは身長の高い役者が時々眩しく感じて目を細めているから、光当てる場所注意して」

「音響の奴らがタイムシングの確認したいって言ってるけどー」
「分かった！ 移動する！」

舞台の中央で円形になってステージの縮尺図を覗き込む役者担当の生徒と大道具担当、演出のテス等もやはり話しこんでいる。

「フェアファックス、結構良かったよな。女の子がどうこうつて言うより、なんか一途つて感じでさ」

上級生の囁きが、ステージ上のこの一群を通り過ぎる瞬間にカミュの耳に入った。

ミロ本人は、円陣の中央に座して真剣に話に耳を傾けているので、きつと聞こえていないだろう。

サイドに一房ずつ金色の滝の流れを残して、後はゆるく首の後ろで髪を括っている姿は、いつもよりミロの精悍さと、繊細な容姿を引き立たせていた。

カミュは少しだけ、それを目の端に焼き付けた。

「うん、だから大道具片付けて別の出すタイムシングと位置もう一回確認してくれ。こんなので手間取ると時間ももつたない。照明はなるべく落とすから、足元確認もしつかりな。黒子の入る順番も確認してくれよ？」

小道具は、グラスとか手紙とかは忘れずに役者が持つて舞台に出る。だれも渡しちゃくれないからな」

注意事項を聞きながら、ふつ、とミロは集団が通り過ぎる

感覚に注意を引かれた。

カミュの居る照明のグループだった。

目が、集団の足を追う。

そのまま舞台の袖で音響のグループと話し合いを持っているらしい。

カミュの姿を確認するまで、視線を照明と音響のグループの中にその姿を探す。

居た。

それで満足して終わるはずだった。

けれどその暗がりの中で、何かがミロの目惹いた。

カミュが、ポールに向けて何か書いたものを渡し、ポールがそれを見て何かを回りに伝えていく。

はっ、とした。

声変わり、という言葉が何より早くミロの言葉で視覚化しのだ。

じつと周囲の言葉に耳を傾けているカミュ、そして、再びペンを紙に走らせる。

メモを、取っている可能性だつてある……。

最近、カミュの居る場所は、そこだけスポットライトが当たっているかのように、すぐに眼に留まる。

それが、余計にミロのフラストレーションを煽る。

めまぐるしく回る時間の中で、カミュに関する全ての反応が破綻していくような気がして、少し怖い。

自分は少し、執着しすぎなんじゃないだろうか？

こうなると、忙しさを口実に、接触の機会が減つてきたのは幸運だつたかもしれない。

大詰めに差し掛かった稽古場でも、そんな風にミロはふとした瞬間にカミュの事を考え、それに気付いては動揺を深める。

「じゃあ、今メンバーが揃っているから最後の第五幕を通してやつてみよう！」

テスが声を張り上げた。

警吏役とアントニオは上級第六学年の生徒が兼任する。二人は舞台中央へ。

舞台左端には、侍女マライアの役に扮するアンソニーが神父としてオリヴィア役のサガ・チエトウィンドの背後に控えた。ミロも慌ててアイオロスの横に並ぶ。

場面は、男装したヴァイオラをその兄セバスチャンと勘違いしその決闘を肩代わりしようとして役人に捕まったアントニオが、広場に引き立てられているシーンから始まる。裁きを下すため同じく広場に姿を現す大公に、ヴァイオラは取成しを請う。

なぜなら、アントニオは勘違いしたとは言え自らの窮地を救つてくれた者の上に、兄の所在を知る唯一の手がかりなのだ。大公は一目でアントニオが先の戦でイリリアに多くの損害を加えた敵方の船長と見破り冷たい視線を送る。

一方、広場の向こうから神父を従えたオリヴィアが登場し、ヴァイオラを発見する。

オリヴィアは昨晚、ヴァイオラの兄セバスチャンと偶然に出会い、男装のヴァイオラと誤解したままにセバスチャンと永遠の愛を誓つていた。

そしてセバスチャンは友人のアントニオを探すために一時の暇をオリヴィアに請い、彼女は受け入れた。

大公はオリヴィアに気付き、アントニオとの対話を中断しオリヴィアに言葉をかける。

オリヴィア

『この私になんの御用が？』

以前にお断りした御用のほかに、まだ私でお役に立つことが御座いますか？

シザリーオ！

約束を守つてくださらなかったのね。お友達を探しにゆくといつてまた公爵のものに戻るなど酷い人ですね』

ヴァイオラ

『お嬢様？』

オーシーノ公

『オリヴィア姫——』

オリヴィア

『公爵、いつものお話でしたらたくさんですわ』

オーシーノ公

『いつまで待つても情けない心をお持ちだ』

オリヴィア

『いえ、私の情けは永遠に変わらないのです』

オーシーノ公

『それでは踏みにじられた私の真心はどこへ行けばよいのです』

オリヴィア

『さあ、どこへなりとお好きなところへ。』

それに、あなたの望まれる場所は、もうすでに他の方によつて決められております』

オーシーノ公

『貴女は私の誠意を僅かにも汲もうしない。』

そして私にも、うすうす察しはついている』

オリヴィア

『永遠の愛を、この神父様の前で誓い——』

今朝方夫婦となりました。

そのシザリーオと』

オーシーノ公

『この大嘘つきめ！』

ヴァイオラ

『御主人様！』

オーシーノ公

『忠義面したその美しい顔の下で、お前は私をあざ笑っていたな！』

ヴァイオラ

『違います！ 決して！』

オーシーノ公

『では姫よ、お暇しよう。』

どうぞいつまでも変わらない石のような心を持ち続けなさい。

い。

しかし、貴女の「鼻屑」のこの子供は、貴女の冷酷な膝元からさらって行くぞ。

これは犠牲の羊にしよ。

私に冷たい仕打ちを続けた、無垢の顔をした老女より醜い心の女に復讐をしよう！』

ヴァイオラ

『——』

冷たく、底冷えのする公爵の残酷な宣言が、ただ一点、オリヴィア役のサガ・チエトウインドだけを目標して鉛のように深く刺さり、その内を抉った。

と、ミロは感じた。

『おい、そこ、次お前の台詞だろうが！』

バシッ、と背中を叩かれてミロは、はつと我に返る。

ミロだけではない。その場にいた全員だ。

『ごめん……。でも、なんか、ロス、恐かったぞ？』

鳥肌を立てながら自らの両腕をさすりつつミロが言うと、

アイオロスはふんつと鼻を笑って言う。

『ここは女からも、自分が信用していた使用人からも裏切られたと思つてアチ切れているところだろう？ 恐くなくてどうするよ？』

「や、そっただけど……」

本気で人を脅すような殺気を感じて、ミロは反対側に立つサガを見上げた。

サガはどう感じているのか。きつとサガだつて怖かつたはずだ。

ある種の共感を目当てに探つたその行為は、ミロの背中に冷水を浴びせた。

見上げたサガは、緑の瞳を大きく見開いてアイオロスをひたと凝視している。

そして、その顔色は、紙より白い。

サガ? とミロが声をかけようとした時、アイオロスの呆れた声が降つた。

「何固まつているんだ、伯爵様まで。伯爵様はこれから自分のだんなに嘘をついたのかつて詰め寄るんだろ? こつちじやなくて自分の旦那睨んでいろよ!」

アイオロスは、眉尻を脩げなく垂らして「おおコワ!」と肩を竦めてその場を緩め、皆の笑いを集めている。

一体何人の人間が見ただろう、空気を飲み込んで微かに震えたサガの喉許、見開いたまま揺れた緑の眼差し、ミロはサガから目が放せなかつた。

その後、練習は滞りなく進む。そして時間が来て終わる。

大道具や音響、その他の係りから、ミロは「結構良かったぞ」と声を掛けられた。何かとミロを足止めして声を掛けてくれるその好意に、ミロは感謝を覚えたが、焦燥感はその飲み

込んで膨れ上がつていた。

手早く椅子や大道具を片付け、ぞろぞろと地下から地上への階段を上るミス寮の人間の列を追いかける。

階段は踊場を挟んで折れながら一階へと続く。

先頭を切つて階段を上るアイオロスと、テスとアンガスの後ろから一人で階段を上つているサガの姿が頭上に見える。

この二人は、こんなふうに離れて階段を上る二人だつたらうか?

ミロは、いきなりとてつもなく大きな不安を感じた。

ミロが膨張する不安感と戦いながら、やつとの事でもと掃除道具入れの我が家へと帰り着いた時、そこには一足早くに戻つていた大道具のアイオリアしか居なかつた。

カミュに自分が感じた不安を相談したい。

カミュならきつと、冷静で客観的な意見を聞かせてくれるに違いない。または、自分が今まで気付かなかつた何かを知っているかもしれない。

「カミュは?」

ミロは、募るなんとも言えない恐怖にも近い不安感を必死に押さえてアイオリアに尋ねた。

アイオリアは、ミロの顔を見るなり、今日のミロの演技の事を褒め、びつくりしたと伝えた後に、

「カミュ、風邪気味で喉が痛いから今晚は医務室に泊まるつてさ。お前に風邪移しちゃヤバイから」

と、ミロに言った。

ミロは、落胆より先に、それは嘘だ、と頭の中で答えが閃くのを感じた。

パツ、とリハーサルの休憩中に見たボールとカミュ二人のやりとりがそれを証拠付けるように映し出される。

嘘を付かれた事に怒りを覚えているのか、カミュの不在にがっかりしているのか、瞬時には判断がつかず、ミロはぼつりと

「風邪？ 大丈夫？」

とだけ応えた。

言葉は静かだったが、気持ちは千地に乱れている。

メモを取ったかに見えたカミュが、それをボールに見せ、ボールは何かカミュに言っていた。

カミュはボールに笑いかけていた。

ボールも当然とばかりにそのカミュの笑顔を受け取っていた。

何故、声変わりしたとはつきり言わないで、風邪をひいたなんてウソを……アイオリアに頼んでまで……！

いや、本当に風邪を引いているって可能性だってあるじゃないか！

でも、どうしてこんなにも、ウソだつて、分かるんだろう……。

「まあ、念のためって事だから大した事はねえよ。だけど、ホントにうつしてお前がぶつ倒れたらシャレにならねえから暫

くお前にも近寄らないようにしてくれってさ」

そう、と呟いてミロは髪を手櫛で梳いた。

ミロはアイオリアの言葉を信じなかった。

逆に確信していた。

カミュは、声変わりを迎えたのだ、と。

その事実は、今日相談出来なかつたサガの事と一緒に、ミロの心の深くまで沈みこみ、深い闇の中に落し込んだ。

翌日、アイオリアの伝言通り、カミュは極力ミロに風邪を移さないように努力をしている振りをしていた。

につこり笑つてミロにコンタクトを取るが、決して声は出さない。食事も同じテーブルに居るが、ミロとはなるべく離れて座っている。

友人たちもよくしたもので、そんなカミュの努力に大いに協力的だった。

そんな状況に、ミロは、怒鳴り付けたい鬱屈を感じていたが、どう見てもカミュの用意した言い訳に分があり、ミロはカミュの思惑通りカミュから上手に遠のけられた。

結局、木曜の午後、オーケストラの練習にはフアゴットのウオルト・パシーがわざわざミロを誘いに来て、カミュはピオ

ラのアンソニー、トロンボーンのマックスらと音楽棟に向かったようだった。

暴力や嘲り、目に見える蔑みには毅然と頭を上げていられる自信がある。

しかし、こんなふうには、やんわりとした拒絶と言うものもあるのかと、ミロは途方にくれ、そしてその精神的な苦痛はミロ本人が自覚するより深くミロの体に沈みこんでいた。

この日の八角堂はいつもより八割早い集音率と、一・五倍の熱気に包まれている。

理由は明白で、この日は初めてチャイコフスキーのバイオリン協奏曲をソリストであるサガとオーケストラで合わせる日と告知されていたからだ。

みな、サガが、あの新しいしなやかな楽器でどのようにチャイコフスキーを奏でるのか、興味津々であつたし、いよいよこの耳で聴ける、という興奮もあつた。

サガ・チェトウィンドの楽器の腕前は、専科の教授も太鼓判を押す。

通常はコンサート・マスターの席に座り、冷静かつ的確な指示を出す彼の弓が、音楽が、どのように自分たちをソリストという形で導くのか、それはカミュの欺きに心を重くするミロにも少しの興奮と熱気を伝え、心を暖めた。

物凄く練習をしていると聞いている。きつと、今までに聞いたこともない、胸を打つチャイコフ

スキーに違いない。

ガタガタと団員が所定の位置に着き始める。

指揮台など必要としないような、上背のあるアイオロスが指揮台に立ち、総譜を脱む。

俯いた顔に、少し伸びた前髪がかかつて濃い影を落とす。少し、瘦せてないだろうか？

ミロはふとそう思った。

それからすぐに、アイオロスは前髪をさつと掻きあげて散らすと、コンマス席に座るアラン・モルグレンに合図を送る。

アランがAの音を出し、オーボエがそれに続く。管の伸び上がるようなチューニングが終わると、今度は弦のチューニングが始まる。

ミロは昨年度まで自分のパートリーダーだったサガの姿を目で追う。

今日は、どこにも腰掛けない。

オーケストラの脇で、そつとあの楽器の音に耳を澄ましている。

全てのチューニングが終わる、サガがアイオロスの横に立つ。アイオロスが一言アンボをサガに確認し、次の瞬間、彼の視線がオーケストラの上を走る。

白い指揮棒が上がり、そして、音楽が始まる。

始めに、第一バイオリンが静に優しく主題の一部を弾き始める、そこに低音弦、管楽器が重なり、ベースの刻むごわごわとした緊張感を孕むダイナミクスが膨らみ、パーカッション

ンもそれに加わる。

轟然と丘を駆け上り、音がその上を突きあがる。そしてふつとたわみ、風が凪いだ次の瞬間、ソリストの音が風を受ける帆となつて広がる。

ミロは、一瞬パトリリーダーの姿よりも、サガの姿に心打たれた。

こんなに、一心に、形振り構わず自分を曝け出して演奏をするサガを見たことがない、と。

必死に自らの音を追い、時に食い入るかのようにアイオロスの指揮を仰ぐ。

そして、サガの音を聞けば聞くほど胸が苦しくなる。何を、必死に呼び掛けているのか？

何故そんなに全力で語りかけるのか？
誰に？

オレ達オーケストラは、全力でサガの音に応えようとしているのに……。

それなのに、どうしてサガの音だけが悲しく響くのか？
サガの薄い唇が真つ直ぐに引き結ばれている。

カデンツァに入った演奏は、これでもかと技術の限りを尽くしてサガの心を歌う。

細く高い歌声は、喉を焼いて叫ぶ鳥のようだった。

フルートたち高音部を担当する管がやがてそつとその音を支えるかのように背後から回り込み、やがて弦も加わりやがて主題に戻り、遅しいオーケストラがそれを受けて鳴る。

掛け合いが始まり、駆け上がる。駆け上る。

もう誰にもその勢いは止められない。
サガの銀色の髪が空に散る。

堂々とした第一楽章が終焉を迎える。

二十分にわたるコンチエルトが、アイオロスの結んだ指の中で、綺麗に円を描いて止まる。

熱狂の渦が、一瞬空中に停止する。
これまでの音の洪水が、嘘のように静まった。

そして、次の瞬間、割れんばかりの喝采と足を踏み鳴らす音が八角堂を揺るがした。

ミロも手放して拍手を贈った。
何度か途中止まり、どこか悲しげなチャイコフスキーのコンチエルトではあつたけれど、この難曲を弾ききつたサガに

対する畏敬と敬愛の念がどれ程膨らんだか、こみ上げるものがどんなに自分をゆさぶつたか。

滴る汗を拭うことより、呆然として呼吸を整えているサガ。
アイオロスは、指揮棒を楽譜台の上に戻した手のまま、目を伏せてじつと総譜を見下ろしている。

何を、考えているのだろうか？

熱狂の中に、ざわりと蠢くものを感じて、ミロはアイオロスから視線を外せなくなった。

やがて、ひとしきり興奮の波が引き、感想を囁きあう言葉

が聞こえ始めた頃、アイオロスが一つ手を叩き衆目を集める。「よし、初めてにしちや上出来だ。」

だが、オーケストラはもつとソロの音を聞くこと。まだ楽譜が頭に入っていないのは分かるが、これまでやってきた曲のように拍子通りには進まないからな、右目で楽譜見て左目でソリストを見るくらいの苦見せろ」

笑いとも、ブーイングとも取れる漣が走る。

「じゃ、最初から返すぞ。まず序奏。」

後から入ってくる楽器群、和音が汚い。縦もバラバラだ。まだソロ入っていないだから両目で指揮棒見てろ。

それから、ソロの直前、八分のスラーは後ろじゃなくて前にアクセントだ」

さつと紙の上を鉛筆が走る音がする。

それを見渡して、一呼吸おいたアイオロスが、サガを見下ろす。

「で、ソロだが――

大いに結構。暫く休憩だ。端で見送っていてくれ」

にこりともしないでアイオロスはサガに告げた。

まるで、大公がオリヴィアに『お前は冷たい女だ』と言ったときのようなのだ。

恐い。

何か、とてつもなく恐いものを感じて、ミロはアイオロスからサガへ目を転じた。

サガは何も言わずに足を動かし、オーケストラの後ろに隠

れた。

ミロはどうしても視線をサガから外せなかった。

八角堂の隅、オケの人影に隠れるようにしてサガは壁に凭れて立っている。

いつもならば、どんな時にも頼りになる、背筋を伸ばした優しい姿が、今は誰よりも深く暗闇の中にあるようだった。

あんな大曲を弾ききったというのに、その事に対する誇りも、満足感もなく――絶望している人間とはこんな瞳をしているのではないかと思わせるほど、暗い淵を覗き込むようなサガの緑色の目が、そこには在った。

「ミロー」

隣のベンジャミン・オルコットに弓の先でつつかれてハッとすると、指揮台の上では既にアイオロスが棒を振り下ろそうとしている、その瞬間だった。

その後、数十分に渡り細々とした調整を繰り返して、最後に一楽章の出だしの部分だけソロと合わせてみようという事になり、アイオロスは「ソロ、入って」とサガを呼ばわった。

ミロはようやくある違和感に気が付いた。

アイオロスが、サガの名前を決して口にしない。

どうして、名前で呼ばないんだ？

ミロは、縮み上がる恐怖にアイオロスの顔を凝視した。そして、首を回してサガを探す。

サガは呼ばれた事に気付いていない。

アイオロスがもう一度「ソロー」と呼ぶ。

「今度もサガは動かない。動かないのか、動けないのか？」

オーケストラのメンバーがざわめく。

とうとうアイオロスがサガの名を口にした。

「最後にもう一回通しだ！ 聞こえないのか？」

どうして、こんなにアイオロスの声が冷たく響くんだ？

ミロが入学したての冬のある日、アイオロスがミロの部屋を訪ねてきた事があった。

自分を馬場に連れ出して、そこで乗馬をしているサガを見た。

サガはオレ達に気付いて側までやつてきた。

乗馬帽を外すと、銀色の髪が広がって——それを、アイオロスがとても優しい目をしてその綺麗な髪に指を指し入れ櫛梳る。

サガはすごく幸福そうな表情を浮かべて立っていた。

ミロは現実のサガに目を向ける。

再びミロの前に立ったサガは、まるで幽霊のようだった。

そして、楽器から、あんなに演奏する事を愛しているサガの指から音が出ない。

サガは体調が優れないと掠れた声で早退を申し出た。

アイオロスは、軽く頷いただけで、オケに向かつて指揮棒を上げた。

オーケストラの音が八角堂に響く中、サガだけが、一人

身を隠すようにしてホールを去った。

サガッ！

思わず椅子から立ち上がった。

アイオロスは、一向にサガの事を見ようとしなない。

ぞつとした。

ミロは逸る気持ちを抑えに押さえてオケの練習が終わるのを待った。

指揮台と総譜を倉庫にしまったアイオロスを慌てて追って八角堂の外に飛び出す。

外はもうとつぷりと暮れて、熱くもなく寒くもない空気が土と空の間に充満している。

「ロスッ！」

ミロは、長いコンパスで、さつさと芝生の中の小路を歩いてスミス寮に向かっているアイオロスを呼び止めた。

ふつ、と振り返ったアイオロスの顔は、いつものような朝気が無く、退屈そうでそれからすこし寂し気だった。

追い付いて、じつと自分を見下ろすアイオロスの表情に、乾いた諦めの色を見て取って、ミロは一瞬息を止める。見返してくる大きな蒼い瞳に、アイオロスははくすりと微笑を漏らした。

「どうしたシザリーオ君。大公閣下は、今は休業中だぞ？」

少し動いた表情に、ミロは安堵し、口を開いた。

「アイオロス、サガと喧嘩したのか？」

アイオロスの琥珀の眼が一瞬真円になり、やがてそれはすうと細められた。

「そんな事聞いてどうするんだ？ フェアファックス」

ミロは一瞬言葉に詰まった。

「そうだ。喧嘩している、と言われたら、自分はどうするつもりだったのだろう？」

何が出来るつもりだったのだろう？

「人に何にかモノを尋ねる時には、その応えに対する対策ぐらい考えてから聞きに来い。チビ」

アイオロスの骨ばって大きく長い人差し指が、ミロの額をピシリと弾いた。

ミロが、その痛みを目をぎゅつと瞑った際に、アイオロスの背中はすつと遠くになつていた。

一方、サガはその後オケの練習には出てこなくなつた。

ミロが心配して尋ねると、練習のし過ぎで腕に負担がかかり過ぎたためドクター・ストップが出たのだと、優しく微笑みながら、心配しなくていいよ、と言われた。

いつもと同じようにサガは微笑んでいるつもりなのかも知れない。

しかし、温度がない。

ミロは、不安と焦燥感に毎夜可まされた。

何かがサガの身の上で起こつている。それは、とても嫌な感じがする。

アイオロスがとんでもない事をサガにやっている。

演技の練習の間に、日々の生活の合間に、恐怖に押しつぶされそうになりながら、ミロは二人の姿を追つた。

そして、ようやく、アイオロスが、サガにやっている事につける名前を見出した後、ミロは怒りと悔しさのあまり眠ることが出来なかつた。

酷虐。

何がアイオロスがそんなマネをサガにするのか、理解出来ない。

何故、サガがそれに靡然としているのか理解出来ない。

一体、あの二人はどうしてしまつたのか？

いくら自分自身に問いかけても答えは出ない。

そして、いつも何らかの答えを必ず見出すカミュも側に居ない。

一体自分に何が出来るだろう？

ミロは何度も何度も自分に問い続けた。

本番に向けて、最後の週末がやって来た。演劇関係者は朝から最終準備に駆けずり回る。

「大道具は前日に舞台袖に移動。間違わないように決められたブリスに置くように」

大道具にそれぞれの寮の名前を殴り書きしたわら半紙を貼りながら、大道具のリーダーが指示を出す。

「本番通りのリハは金曜日の午後二時からになった。各自それ

までに移動と順番、出のタイミンク頭に叩き込んで。退場する袖と入りの袖を間違えるな！」

テスが枯れ始めきてた声で怒鳴る。

ミロがふと寝不足でボーッとする頭で視線を上げると、ピンスポットライトが設置されている左の張り出しに、カミュとボールの二人がいて、熱心に手元の紙を覗き込んでいる。

また、カミュを見つけてしまった。

カミュがボールに何かを伝えようとした時、ボールはさつと胸のポケットから小さなメモ帳を取り出してカミュに渡している。

カミュはまだ、三人部屋には戻ってきていない。

——オレの世話、結構積極的に焼いた癖に、オレがお前に近付くのはNGかよ！

バカヤロウ、赤毛の少年にこんな舞台の上から言葉を投げかけたとして、届くはずもない。

それでも、何度もカミュに向かってミロはバカヤロウと繰り返した。

話したいことが、沢山あるのに、カミュが話したい人間は、ボールだけなのだ。

長い忍耐の準備期間を経て、たった一日だけの祭りの日がやってくる。

舞台当日、午前のうす曇の天気はもたず、午後になってぱらぱらと小さな水滴が空から零し始め、時と共にその勢いを強くしていた。

「うわつ、ブラバンの奴等気の毒に」

「え？ 一応テントの下でやっているから大丈夫だろう？」

天井棧敷で、小さな明り取りの窓の向こうを覗き込む少年が二人、ひそひそと声を交わしている。

スミス寮のアンソニー・スミスとエドモンド・ハウだ。

スミス寮の演技は、午後の部の一番最後で今はその一つ前、ロウ寮のマクベスが上演されている。

「いつまでお客さん残ってくれるかな？」

「遠方からの家族は殆ど街に宿を取っているし、近辺の人間は車で来ているから結構最後まで残るだろう？」

「うーん……残って欲しいような、欲しくないような……」

迫力のあるマクダフのマクベス王への復讐の言葉に、場内はシンと静まり返り、次の瞬間割れんばかりの拍手が沸き起こった。

「お前、そろそろ着替えなくていいのかわよ？」

「いけないよつな、そんな気も……」

ハウは、すっかり緊張し怖気づいているアンソニーの右手を捕まえて、非常扉を開けると地下の控え室へと向かった。

三つのリハーサル室と、各種倉庫、ロッカールーム、シャワー

室、鏡の完備された個人控え室など、地下一階には大小さまざまな部屋がひしめきあつてゐる。

既に演技を終えたローズ寮の学生もまだちらほらシャワーを使うために残つてゐる。

唇が青ざめ、だんだん歯の根が合わなくなつてゐるアンソニーを、スミス寮の控え室に押し込むべく、ハウは札のかかつた扉を押し開く。

「遅い」

衣装係のグループ・リーダー、ドミニク・リンドンがピシリと言ふ。見渡せば、どうやらアンソニーが最後の一人のようだった。

「なんかミロ、姫つてよりは王子つて感じだな」

ハウは隣で長く付け足された髪を結つてもらつてゐるミロを見て言つた。

鏡を覗くミロの瞳は鋭く、とても恋する乙女のそれには見えない。

バタン、扉が開いた。

「今、ロウ寮の芝居終つた！ すつげえ拍手で、スタンディング・オベーション一歩手前つて感じた!!」

ざりつ、とテスの歯軋りが響いた。

マクベスはシェイクスピア四大悲劇の一つとして内容もよく知られてゐるし、戦のシーンや魔女達、恐怖に怯える王女など、まがまがしくもインパクトが強い。

そういつた狂気を演じ、学生にとつて難易度が高い芝居

だが、うまくこなせば印象は強い。

どう対抗できるか？

自分の演出は万全だろうか？

テスはごくりと喉を鳴らした。

泣いても笑つても一回きりの本番だ。

深く深呼吸をしてマイケル・アンダーソン、ジェイク・オーエンが立ち上がる。

アンガス・エマーソンはひよいと椅子から立ち上がりにつこりと笑顔を輝かせる。

サガ・チエトウインドは深く喪のベールを被り静かに佇み、シユラ・コーツは耳に詰めていたイヤホンを外す。

ドミニク・ポイルは「よし」と気合を入れ、ミロは隣でまだ緊張に身を硬くしてゐるアンソニーに手を差し出した。

「大丈夫。これまで精一杯練習してきたじゃないか。たとえ途中でとちつても、最後まで行けるさ」

そう言つてゆつくりと大きく笑つたミロの顔は、どこか余裕があり堂々としていて、それはアンソニーが始めて見る顔だった。

『お前、恋をした事があるか？』

『はい。いささか覚えが御座います』

ミロのヴァイオラは真つ直ぐ顔を上げて、しっかりと応える。暗い客席の向こうを見据えて、今もその恋を持つてゐると無言で答える。

「——あいつ、こつち見ていた？」

ポールは一瞬間の中に立つこの狭い橋のような場所に、真つ直ぐに青い眼差しが飛び込んできたように感じて、直ぐにそれを否定した。

こんな場所、見える筈がない。あんなに明るい舞台の上から。カミュの姿があいつに見えるはずが無い、と。

『私の父に娘がありました。そして、ある男を愛しました』

『ふん、それでどうなった？』

自分の恋を誰にも言わず、自分の胸に秘めたまま、惹きめて、ふさぎこんで、

いつか虫の巣くう薔薇の花のようにしぼんでやつれ、それでも石に刻んだ「忍耐」の石の像のように

じつと微笑みかけておりました。

これが真実の愛ではありませんか？
私たちが男は口にして騒ぎ立てますが、
その見せかけ以上の真心をはたして持つてもつているので
しようか？

——そうだ。自分は本当にそんな人を知っている。

アイオロスがそれに気付かないなど断固として信じない。
ミロはひとと大公を見返して毅然と応える。

大公が、薄く笑った。

新鮮な解釈のヴァイオラだった、とテスは演出賞を受賞した。他寮の演出担当者はあんなのは邪道な演出だ、外見に騙されやがったな笨蛋賞！とみな拳を握った。

スミス寮は他にも、

助演女優賞をサガ・チエトウインドが

助演男優賞をシユラ・コーツ。

新人賞をミロ・フェアファックス。

そして、視覚効果で照明が賞を獲得し、最優秀作品賞でグランド・フィナーレを飾る事となった。

その晩のスミス寮の打ち上げは、有終の美を飾った一年に誰もが酔った。

賞の受賞者はそれぞれスピーチをし、皆気前よく拍手を贈った。

視覚効果賞の順番が回ってきたとき、グループ・リーダーのライオネルは、マイクをカミュの手に握らせた。

そして、照明班の最功労者とカミュを紹介し、カミュの口から出た声に、皆はあつと驚いた。

彼もまた、少年時代を抜け、いつの間にか青年へ一歩を踏

み出していたのだ、と。

「カミュ！」

人込みを掻き分けて、ミロはカミュのもとへ泳ぐようにして辿り着いた。

おめでとうを言うつもりでわざわざボールが居るにもかかわらず来てみたものの、イザと面と向かうと色んな感覚が邪魔をする。

カミュを抱きしめた感触。

非現実のカミュの表情。

カミュの指が頭皮を滑つたときに走った電気。

ウソを付かれた痛み。

思うように近づけなかつた焦燥。

何もかもがない交ぜになつて、ミロの薄い胸の内でもわりと膨らんだ。

一瞬、ミロはカミュの穏やかな笑顔から目をそらし、そして、大きく意を決して口を開いた。

「賞、おめでとう。」

目出度い席に悪いけど、どうしても気に入らない事があるから言つておく。

お前、先週に声変わつて、それ、ずっとオレに隠していただろう。

もの凄く腹が立った

今も、カミュの顔を真っ直ぐに見ると鼻苦しさを感じる。

緊張して、掌に汗をかく。

こんなに、気になつて、好かれたいと願う人間は後にも先にもカミュだけかもしれないと予感が走る。

カミュの何が特別なのか。

何故こうもカミュに執着するのか。

隠し事をされると腹が立つ。

ボールがカミュの側を離れないことに、自分で頼んでおきながら奇立ちを覚える。

こんな状態の自分は絶対におかしい。

変だ。

でも、カミュの声が、永遠にボールのものであるならば、

カミュのピアノは、オレが貰う——！

ボールには、それだけは譲らない。

視線を、びたりと合わせて宣言する。

「あと一ヶ月後には、オレだつて変わつてる」

ボールが、失礼な奴だ、とカミュに囁いているような気がしたが、ミロは、二人を振り返らずに立ち去つた。

誰が引いてなどやるものか。絶対に食い込んでやる。身勝手で、けれど妥協のしようの無い欲求に、ミロは自分の決意を重ね、もう一つの目的地に向かった。

さあつと風が吹き抜けて、黒い梢を鳴らしている。

榎木の太い枝ぶりの隙間に、時折赤い小さな光が明滅する。

その灯りを目印に、サクサク下生えの上をミロは歩いた。

太い枝に腰掛けて煙草を啜える青年の前髪が揺れ、琥珀の瞳が現れる。

「アイオロス、一つ聞きたい事があるんだけれど」

ミロは、硬くこぶしを握つて木上の人を見上げた。

「何だ？」

アイオロスが気の無い返事を返す。

ミロは、奥歯を一旦食い締めてから問い掛けた。

「どうしてサガに辛く当たるんだ？」

沈黙が、紫煙と共に木の葉から流れ、ふつと笑つたような

気配が夜気に滲んだ。

「何を言つてるんだ、お前？」

アイオロスのタバコを啜えた唇が綺麗に弧を描いた。

ミロは夜目が効く。両足を踏ん張り、腹に力を入れて彼は

言葉を続けた。

「一緒に舞台の上に立つていて、よく分かつたよ。」

アイオロス、——今、サガに暴力を振るつているだろう？

故意の無視や、行き過ぎた拒絶は無言の暴力だ。ふるわれ
た相手の心を滅茶草茶に傷付ける。それは、「犯罪」と同義だろう？

どうして、そんな事を、あんたが、サガにするんだ？」

願うような気持ちで、ミロはアイオロスを見上げ続けた。

何を願うのか、何に願うのか、判然としないままに。

そして、その願いを、悔りを含んだ冷たい声がち砕いた。

「——人の生活圏に十疋で入つて来ようとするなぞじ。」

お前には関係の無いことだし、最近お前は銀色のお姫様から卒業して情熱的な赤毛の友人に「執心じゃないのか？」

「アイオロス……」

ミロの爪を硬く皮膚に食い込ませて歯の間から声を絞り出した。

「話、摩り替えんなよ。じゃあロスはサガから撤退中つてこと

なのか？」

あんなにサガを特別扱いしていたくせに——！

サガの声、分かっているのだから？ 屈しているんだろ？」

やがて、ミロは必死に叫んでいた。

「どうしてそれを無視するんだよつ！ 卑怯じゃないかつ。」

ロス、後悔するのは、あんただぞ？ 自分の好きな人間傷

付けて、突き放して、それであんたはこの先どうやって生きていくのさ？ あんたの信念はどこに捨てていくんだよつ」

「誰が誰にとつて好きだと？」

色も熱も抑揚もない声が降つてくる。

なんて自分をぞつとさせる声だろう。

ミロは、どうかアイオロスが頑なに張つている障壁の中に
言葉が届きますようにと懸命に言葉を綴る。

どうしたら、言葉は届くのか？」

アイオロスは、オーケストラの中に自分の居場所を作つてくれた人だ。

サガは、寛容と忍耐と親愛の情で自分を屈服させた。

馬鹿馬鹿しい感情だが、まるで二親の離婚話を撤回させた子供のような気分だった。

「そんなの、簡単に分かるじゃないか！」

オレは、もう二年も前からロス達のこと見ている。

誰が誰にとつて特別かだなんて、そんなの、今更じゃないか。

オレは、コントラバスもつてロスの隣に座つた時から、

ロスがサガの事が好きで、サガがロスの事、凄く大事に思つて、いることくらい分かつていたさ。そんなの物凄く初步的な事じゃないか……そんなの、消えうとしたつて、絶対に消えないだろう？ 消えることじゃないだろう——」

炯炯と冷たく光つていた琥珀色の光がすうつと細くなり、静かになつた。

「そうそう世の中、単純なことだらけじゃねえよ」

「世の中を、複雑にしているのは、人間の方だ、アイオロス。」

ほんとの世界は、もつとシンプルできつと、ずつと綺麗だ」

「悩みのねえ能天気な垂れ流すな」

「違う。悩みは外から来るんじゃない。自分の中から来るんだ。」

だから、絶対に、世の中はシンプルだ——」

ザアツと風が渡つた。

梢の上の青年は、琥珀の瞳を己が弓手で隠し、大地に足を踏みしめる少年は、ギラリと一層眼差しを強くして空を射つた。

「サガとロスは、絶対に別れちゃいけないんだ……！」

齒軋りと共に届けられた言葉に、アイオロスは失笑した。

「バカだろお前？ 何言つてんのか、自分で分かつてんのか？」

「分かつてる。オレは、絶対に間違つてない」

風向きが変わり、鼻に届いた煙草の臭いに顔を顰めながら

ミロは、きつぱりと言い切つた。

吹く風は温かく、夏の到来を告げていた。

参考文献 「森川久美短編集 十二夜」

「十二夜 ウィリアム・シェイクスピア作／三神勲訳」

英国寮生物語 第五卷

「ある十二夜」

平成一九年六月十日 発行

平成一九年十一月四日 改訂

著者 祥曲星祈 ・ 和海

発行所 株式会社 仔牛ともぐら舎



<http://moo-and-mole.com>